

トマス・アキナス 『定期討論集 靈的被造物について』 第三項 試訳

著者	石田 隆太
雑誌名	宗教学・比較思想学論集
巻	16
ページ	57-91
発行年	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00125295

トマス・アキナス

『定期討論集 霊的被造物について』第三項 試訳

石田 隆太

1 はじめに

本稿は、トマス・アキナスの『定期討論集 霊的被造物について (*Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*)』¹という著作の全訳を目指す試みの一環であり、以下の拙稿の続編となっている。

石田隆太「トマス・アキナス『定期討論集 霊的被造物について』第一項 試訳」,
『宗教学・比較思想学論集』, 第15号, pp. 33-56, 2014年.

石田隆太「トマス・アキナス『定期討論集 霊的被造物について』第二項 試訳」,
『筑波哲学』, 第22号, pp. 129-53, 2014年.

この試訳の主要な意図に関しては前稿を参照されたい。なお本稿においては、これまで以上にレオ版の註を反映させる形での翻訳を試みた。その際に、トマスを含め西洋古代・中世の主要な哲学者・思想家たちの邦訳文献を最大限に活用した（具体的な文献に関しては註にて明記し、引用に際しては一部表記等を改めた所がある）。それはひとえに、日本のこれまでの翻訳研究を本稿に関係する限りで最大限に取り込むことにより、トマスの日本語による翻訳研究に資するためである。最終的には、トマスの翻訳研究としてはあくまでトマス研究の枠内において翻訳研究の基礎を築くべきであろう。しかしながら、それを行うためにはまずトマスの全著作を日本語に翻訳する作業が求められるのであり、本稿は細やかながらそのような企てを図るものである。

本稿の訳文作成にあたっては、西洋中世哲学研究会（*Concilium Mediaevalis Philosophiae Investigatorium*、略称 CoMPhi）を始めとする以下の方々との協力を得ることができた。この場を借りて感謝申し上げます（氏名は五十音順、敬称略）。

内山真莉子（慶應義塾大学、西洋中世哲学研究会）

小山田圭一（東京工業大学）

¹ 『定期討論集 霊的被造物について』の著作年代などに関しては、次のものを参照: Jean-Pierre Torrell, *Initiation à saint Thomas d'Aquin*, 3e édition (Paris: Éditions du Cerf, 2008), pp. 235-6, p. 490. Torrellによれば、『定期討論集 霊的被造物について』の基になった討論が行われたのは1267年から1268年の間であるとされる。この時期はトマスがイタリアに滞在していた時期にあたる。Cf. James A. Weisheipl, *Friar Thomas D'Aquino* (Washington, DC: The Catholic University of America Press, 1983), p. 364. Weisheiplも1267年から1268年の間という立場である。

川合恵生 (東京女子大学)
菅原領二 (慶應義塾大学、西洋中世哲学研究会)
野邊晴陽 (慶應義塾大学、西洋中世哲学研究会)
和田史比呂 (慶應義塾大学、西洋中世哲学研究会)

2 凡例

- ・訳出にあたっては次のレオ版を底本とした。

Cos, J. ed. *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita Tomus XXIV-2, Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*. Roma: Commissio Leonina, 2000.

- ・他の版としては次の批判的校訂版も参照した。

Keeler, L. W. ed. *Tractatus de spiritualibus creaturis*. Roma: Apud Aedes Universitatis Gregoriana, 1946.

- ・なおレオ版のテキストにはいくつか読解の困難な箇所等があるため、所によって次のものが提案する読みに従った。

Guldentops, G. & C. Steel. "Critical Study: the Leonine Edition of *Q. de spiritualibus creaturis*." *Recherches de Théologie et Philosophie Médiévales* 68, 1 (2001): 180-203.

- ・今回参照できた近代語訳は以下の通りである。

英訳

FitzPatrick, M. C. *On Spiritual Creatures*. Milwaukee: Marquette University Press, 1949.

Goodwin, C. R. "A Translation of the *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis* of St Thomas Aquinas, with Accompanying Notes." M.A. thesis, Australian Catholic University, 2002.

仏訳

Brenet, J.-B. *Les créatures spirituelles*. Paris: J.Vrin, 2010.

伊訳

Savagnone, G. "Le creature spirituali." In *Le questioni disputate*, vol. 4, pp. 524-809. Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2001.

- ・訳文中の [] は訳者による補いであり、() は原語の引用である。
- ・訳語の選定にあたってはこれまでのトマスの様々な日本語訳等を参照したが、参照したものの一例として次のものを挙げておく。

長倉久子・蒔苗暢夫・大森正樹『トマス・アキナス「神学大全」語彙集(羅和)』, 新世社, 1988年。

- ・註にて使用した略号の一覧は次の通りである。なお、慣例に従って、アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を、プラトンの著作にはステファヌス版の頁数を付した。

Ed. Barach

Excerpta e libro Alfredi Anglici de motu cordis. Item Costa ben Luca de differentia animae et spiritus, ed. C. S. Barach. Innsbruck: Verlag der Wagner'schen Universitaets-Buchhandlung, 1878.

Ed. Boese

Proclus, *Elementatio theologica translata a Guillelmo de Morbecca*, ed. H. Boese. Leuven: Leuven University Press, 1987.

Ed. Borgnet

B. Alberti Magni, Ratisbonensis Episcopi, Ordinis Praedicatorum, Opera omnia, ed. A. Borgnet & É. Borgnet. Paris: Apud Ludovicum Vivès, 1880-99.

Ed. Brady

Magistri Petri Lombardi, Parisiensis Episcopi, Sententiae in IV libris distinctae, editio tertia ad fidem condicum antiquiorum restituta, ed. I. Brady. Grottaferrata (Romae): Editiones Collegii S. Bonaventurae ad Claras Aquas, 1971-81.

Ed. Buytaert

Saint John Damascene, *De fide orthodoxa, Versions of Burgundio and Cerbanus*, ed. M. Buytaert. St. Bonaventure (New York), Louvain, Paderborn: The Franciscan Institute - E. Nauwelaerts - F. Schöningh, 1955.

Ed. Cathala & Spiazzi

S. Thomae Aquinatis Doctoris Angelici, In Duodecim Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio, ed. M.-R. Cathala & R. M. Spiazzi. Roma: Marietti, 1977³.

Ed. Colon.

Alberti Magni Opera omnia, ad fidem condicum manusccriptorum edenda appartu critico notis prolegomenis indicibus instruenda curavit Institutum Alberti Magni Coloniense. Aschendorff: Monasterium Westfalorum, 1951-.

Ed. Crawford

Averrois Cordubensis Commentarium magnum in Aristotelis de anima libros, ed. F. S. Crawford. Cambridge (Massachusetts): The Mediaeval Academy of America, 1953.

Ed. Geyer

Peter Abarlards philosophische Schriften, I. Die Logica Ingredientibus. I. Die Glossen zu Porphyrius, ed. B. Geyer. Münster i. W.: Verlag der Aschendorffschen Verlagsbuchhandlung, 1919.

Ed. Guarenti

S. Thomae Aquinatis Doctoris Angelici, Catena aurea in quatuor Evangelia, ed. A. Guarenti. Roma: Marietti, 1953².

Ed. Leon.

Sancti Thomae de Aquino, Opera omnia. Roma: Comissio Leonina, 1882-.

Ed. Mandonnet

S. Thomae Aquinatis, Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi episcopi Parisiensis, ed. P. Mandonnet. Paris: P. Lethielleux, 1929.

Ed. Moos

S. Thomae Aquinatis, Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi episcopi Parisiensis, ed. M. F. Moos. Paris: P. Lethielleux, 1947-56.

Ed. Pattin

Simplicius, *Commentaire sur les Catégories d'Aristote*, ed. A. Pattin. Louvain, Paris: Publications universitaires de Louvain, Éditions Béatrice-Nauwelaerts, 1971-5.

Ed. QR

S. Bonaventurae Opera omnia. Ad Claras Aquas (Quaracchi): Collegium S. Bonaventurae, 1882-1902.

Ed. Saffrey

Thomas D'Aquin, *Super librum de causis expositio*, ed. H.-D. Saffrey. Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2002².

Ed. Ven.

Aristotelis Opera cum Averrois commentariis. Venetiis: apud Junctas, 1562-74.

Ed. Van Riet

Avicenna Latinus, Liber de anima seu Sextus de naturalibus, ed. S. Van. Riet. Louvain, Leiden: Éditions orientalistes, E. Peeters, E. J. Brill, 1968-72.

Ed. Willis

Ambrosii Theodosii Macrobiani, Commentarii in somnium Scipionis, ed. I. Willis. Leipzig: BSB B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1970.

PG

Patrologia Graeca (J.-P. Migne, *Patrologiae cursus completus, Patres Graeci*, Parisiis, 1857-1868).

PL

Patrologia Latina (J.-P. Migne, *Patrologiae cursus completus, Patres Latini*, Parisiis, 2 ed.).

3 試訳

靈的被造物について

第三項²

第三に問題となるのは、人間の魂であるところの被造の靈的実体は媒介 (medium) を通じて身体 (corpus) と合一するの否かである。

【異論】

そしてそうである [=人間の魂であるところの被造の靈的実体は媒介を通じて身体と合一する] と思われる。その理由は以下の通りである。

一。ディオニュシオスが『天上位階論』第十三章で述べているように、最上位のものが最下位のものと結びつけられるのは媒介を通じてである³。しかるに、靈的実体と物体

² 平行箇所は以下の通り: 『「命題集」註解 (*Scriptum super libros Sententiarum*)』第2巻第1区分第2問題第4項; 『対異教徒大全 (*Summa contra Gentiles*)』第2巻第71章; 『定期討論集 魂について (*Quaestiones disputatae de anima*)』第9問題; 『「靈魂論」註解 (*Sententia Libri de Anima*)』第2巻第1章; 『神学大全 (*Summa theologiae*)』第1部第76問題第3項、第4項、第6項、第7項。

³ Cf. デイオニウシオス『天上位階論 (*De caelesti Hierarchia*)』第13章3節 (PG 3, 301 A), 「そのうえ、

(corpus)の間には媒介として自育的魂 (anima uegetabilis) と感覚的魂 (anima sensibilis) がある。故に、理性的魂 (anima rationalis) であるところの靈的実体が身体と合一するのは、自育的魂と感覚的魂を媒介とすることによってである。

二。さらには、哲学者アリストテレスが『靈魂論』第二巻で述べているように、魂とは「可能態において生を有する器官の身体の現実態である」⁴。故に、可能態において生を有する自然の器官的身体は、質料が形相に対するようにして魂に関係づけられている。しかるに、これ——すなわち自然の器官的身体——は、実体形相を通じてのみ存在する。故に、その実体形相は、何であれ質料においては理性的魂であるところの靈的実体に先行するのであり、同じ理由で感覚的魂や自育的魂といった他の付随する形相もそうである [=理性的魂であるところの靈的実体に先行する]⁵。

三。さらには、質料は類ではなく形相も種差ではなく——なぜなら質料と形相のいずれも複合体について述定されないからである——、また類と種差は種について述定されるものの、哲学者アリストテレスの『形而上学』第八巻にあるように、類は質料からと

それは知性を有するすべてのものにそれぞれとの関係に応じて現れ、自分自身の光の賜物を最上位の諸存在に手渡し、それを第一のものである彼らを通して下位のものに、それぞれの階級が神を見ることのできる程度に応じて秩序正しく伝えるのである」(今義博訳、『中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』, 平凡社, 1994年, p. 398)。

⁴ Cf. アリストテレス『靈魂論 (De Anima)』第2巻 (412a27-b6), 「それゆえ魂とは、「可能的に生命をもつ自然的物体の、第一次の終極実現状態」と規定される。[略] そこで、魂のすべてにわたって何らかの共通する事柄を語らなければならないとすれば、それは「道具的な性格の自然的物体の、第一次の終極実現状態」ということになるだろう。」(「魂について」中畑正志訳、『アリストテレス全集7』, 岩波書店, 2014年, p. 66); トマス・アクィナス『『靈魂論』註解』第2巻第1章 (Ed. Leon., t. 45.1, p. 72, ll. 358-365), 「次に、「ところで、もし、アニマのすべてについて何か共通的なことを…」と言うとき、アリストテレスは、既に述べられたすべてのことから、アニマの定義をまとめている。そして、もし、すべてのアニマに適合する何らかの共通的な定義が与えられなければならないとしたら、以下のよう「であろう」、と彼は言っている。すなわち、アニマは「器官を有する自然的物体の第一現実態」である、という定義である。だが《可能的に生命を有する》という言葉をつけ加える必要はない。というのも、既に述べられたことから明らかなように、この表現の代わりに、器官を有する、という表現が用いられているからである」(「トマス・アクィナス『デ・アニマ』註解』I, c.1, c.2; II, c.1) 加藤雅人・松根伸治・大月栄子・島田佳代子・周藤多紀・関沢和泉訳, *Kansai University Informatics Working Paper Series*, No. 6, 1997年, pp. 26-27)。「可能的に生命を有する」という表現はとりわけ13世紀から見られるものである。この表現を伴うにしろ伴わないにしろ、ここで述べられているような魂の定義はスコラの学者たちの間で徐々に共通理解として受容されていった。トマス自身も様々な著作においてこの定義を用いている。具体的には次の通り: 『対異教徒大全』第2巻第61章 (Ed. Leon., t. 13, p. 428a, ll. 7-8); 第72章 (p. 456a, ll. 5-6); 第89章 (p. 541a, l. 20); 第4巻第44章 (t. 15, p. 147b, ll. 15-16); 『神学大全』第1部第76問題第4項第1異論 (Ed. Leon., t. 5, p. 223) および第1異論解答 (p. 224); 第76問題第5項反対異論 (p. 227); 第76問題第8項第2異論 (p. 232) および第2異論解答 (p. 233); 第77問題第1項主文 (p. 237); 第3部第46問題第7項第1異論 (t. 11, p. 444); 第75問題第6項第2異論 (p. 173); 『『ニコマコス倫理学』註解 (Sententia Libri Ethicorum)』第9巻第7章 (Ed. Leon., t. 47.2, p. 525, ll. 89-90) など。

⁵ この第二異論と同様の異論が『定期討論集 魂について』第9問題第7異論 (Ed. Leon., t. 24.1, p. 77, ll. 57-66) にも見られる: 「さらには、何であれ形相の定義の内にはその形相に固有の質料が指定される。しかるに、形相である限りでの魂の定義の内には、可能的に生命を有する自然的で器官的な身体が指定されること、『靈魂論』第二巻で明らかな通りである。故に魂は、このように固有な質料としての身体と合一する。しかるに、可能的に生命を有する自然的で器官的な身体が存在できるのは形相を通じてのみである。故に魂が質料と合一するのは、第一に質料を完成させる或る形相を媒介とすることによってである」(拙訳、以下特に注記がない場合は同様)。

られ種差は形相からとられる⁶。しかるに、人間の類は感覺的本性 (*natura sensitiva*) からとられるところの動物であるが、それに対して [人間の] 種差は理性的魂からとられるところの理性的 [という種差] である。故に、感覺的本性は、質料が形相に対するようにして、理性的魂に関係づけられている⁷。しかるに、感覺的本性は感覺的魂を通じて完成される。故に、感覺的魂は本性において理性的魂よりも先在し、同じ理由で先行する他のあらゆる形相もそうである [=理性的魂よりも先在している]。

四。さらには、『自然学』第八巻で証明されているように、自分自身を動かすものはすべて二つの部分に分けられ、その一方は動かす部分であり、もう一方は動かされる部分である⁸。しかるに、人間および何であれ動物は自分自身を動かすものである。

⁶ Cf. アリストテレス『形而上学 (*Metaphysica*)』第8巻 (1043 a 19-21), 「けだし差別相についての説明方式はそのものの形相またはその現実態を説くものと認められ、そのものに内在する構成要素についての説明方式は主としてそのものの質料をあげているものと認められるからである」(出隆訳、『形而上学 (上)』, 岩波書店, 1959年, pp. 300-1)。

⁷ Cf. アリストテレス『形而上学』第8巻 (1043 a 2-7), 「そこで、以上の事実からして、いやしくも実体が各々の事物のそうあるゆえんの原因であるからには、明らかに我々は、これらの差別相 [種差] のうちに、なにがこれら各々の事物のそうあるゆえんの原因であるかを問い求むべきである。ところで、これらの差別相はいずれも、それだけでは実体でなく、[その質料との] 結合においても実体ではないが、しかし、ともかく、これらの各々には実体との類比的な関係がある。すなわち、あたかも或る事物の実体を定義する場合にその質料の述語とされるものがその現実態そのものであるように、実体以外のものの定義される場合も最も多く現実態に類比的なものがその述語とされるからである。」(出訳 (上), pp. 299-300); トマス・アクィナス『「形而上学」註解 (*Sententia Libri Metaphysicae*)』第8巻第2講 (Ed. Cathala & Spiazzi, p. 407), 「実際のところ、種差が形相であるとか類が質料であるといったように了解してはならない。というのも、類と種差は種について述定されるが、質料と形相は複合体について述定されないからである。しかしながらこのようなこと [=種差が形相であるとか類が質料であると言うこと] が言われる理由は、類が事物において質料的なものからとられる一方、種差が [事物において] 形相的なものからとられるということにある。例えば、人間の類とは動物である。なぜならそれ [=動物であること] は感覺的本性を有するものであることを表示するからである。その感覺的本性とは実のところ知性的本性に対して質料的に関係づけられている。その知性的本性から理性的 [という種差] がとられるのであり、それ [=理性的であること] は人間の種差である。実際、理性的 [であること] は知性的本性を有するものであることを表示する。」

⁸ Cf. アリストテレス『自然学 (*Physica*)』第8巻 (257 b 12-13), 「それゆえ、それ自身を動かすものは [とにかく何らかの仕方] で その或る部分が動かし、他の部分が動かされるのである」(出隆・岩崎允胤訳、『アリストテレス全集3』, 岩波書店, 1968年, p. 324); トマス・アクィナス『「自然学」註解 (*Sententia Libri Physicorum*)』第8巻第10講 (Ed. Leon., t. 2, pp. 401-2), 「アリストテレスは第一に、自分自身を動かすものは二つの部分に分けられることを示している。すなわち、一方の部分が動かし、もう一方の部分が動かされる。第二に、以上のような諸部分がいかにして互いに関係しているのかを彼は示している。[略] 第一に、自分自身を動かすものにおいては一方の部分が動かしもう一方の部分が動かされるということを彼は示しているが、それは、全体は自らの全体を動かすことはできないということに基づいている。[略] 故に以上から、自分自身を動かすものにおいては一方の部分が動かしもう一方の部分が動かされるという要点となることを彼は結論している。」など。同じことをトマス自身も様々な著作で述べている。具体的には次の通り: 『対異教徒大全』第2巻第82章 (Ed. Leon., t. 13, p. 514a, ll. 27-28), 「動かすものは二つのものから複合されており、その一方は動かすものでありもう一つは動かされるものである」(川添信介訳、『トマス・アクィナスの心身問題』, 2009年, p. 295); 同 (p. 515a, ll. 4-10), 「また、何ももの同じものに関して現実態にありかつ可能態にあるということとはできない。なぜなら、同じものが同じものに関して動かすものでありかつ動かされるものであることは不可能である。そうではなく、もし何かが自分自身を動かしていると言われるならば、その一部分は動かし別の部分が動かされているのでなければならない。そして、<動物が自分を動かしている>というのはこの意味なのである。魂

ところで、その人間および何であれ動物の内、動かす部分は魂である一方、動かされる部分はありのままの質料 (*materia nuda*) ではありません、むしろ身体でなければならない。なぜなら、動かされるものはすべて物体だからであり、それは『自然学』第六巻で証明されている通りである⁹。ところで、身体は或る形相を通じて存在する。故に、或る形相が質料において魂よりも先在している。かくして前述のことと同じである¹⁰。

が動かすものであり、身体が動かされるものだからである」(川添訳, p. 301) ; 『神学大全』第1部第70問題第3項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 180) , 「だからして、アリストテレスも『自然学』第八巻において、「自己自身を動かす第一なるもの」は二つの部分から成り立っている、その一つは動かす部分、他は動かされる部分である、ということを示したのち、これら二つの部分がいかにかして一つになっているかを規定するにおよんで次のようにいうのである。すなわち、こうした合—は接触によるものなのであって、もし双方がともに物体である場合には二者の相互的な接触によるのであるし、またもし一方が物体でない場合には、後者の前者への接触(その逆は不可)による、と——」(『神学大全 第5冊』高田三郎・山本清志訳, 創文社, 1967年, pp. 103-4) ; 第2-1部第51問題第2項第2異論解答 (t. 6, p. 328) , 「同一のものが同一の観点からして動かすものであり、かつ動かされるものであることはできない。しかし、『自然学』第八巻において証明されているごとく、同一のものが、異なった観点からして、自らによって動かされることについては何ら問題はないのである。」(『神学大全 第11冊』稲垣良典訳, 創文社, 1980年, p. 56) ; 第3部第32問題第4項主文 (t. 11, p. 337) , 「さらにまた、或るものが自分自身を動かすということもありえない——そのものが、一つは動かす部分で他は動かされる部分というふうに二つの部分に分割されているのでなかったら。だがこのことは『自然学』第八巻で証明されているように、生命あるものどもにおいてのみ起ることである。」(『神学大全 第33・34冊』稲垣良典訳, 創文社, 2008年, p. 54) ; 『定期討論集 悪について (*Quaestiones Disputatae de Malo*)』第2問題第11項第8異論解答 (Ed. Leon., t. 23, p. 61, ll. 261-3) , 「何ものも同じものに即しては自分自身を動かさない。しかしながら異なる部分に即して[自分自身を動かすことを]妨げるものは何もないこと、『自然学』第八巻で明らか通りである。」など。

⁹ Cf. アリストテレス『自然学』第6巻 (234 b 10-20) , 「転化するものはすべて可分割的でなければならない。なぜなら、転化はすべて或るものから或るものへであり、転化するものがそれへと転化していたところのそのうちにあるときには、もはや転化しておらず、それ自身としてもすべての部分にしてもそれから転化していたところのそのうちにあるときには、まだ転化していない(というのは、それ自身としても部分にしてもこのような状態にあるものは転化していないから)、それゆえ、[転化しているからには] 転化するものの或る一部が一方のものの中にあり、他の一部が他方のものの中にななければならないからである。というのは、転化するものはこれら両者のうちにあることもできないし、どちらのうちにもないこともできないから[すなわち、転化するものは部分に分かれ、その部分において両者のいずれかのうちにある]。(ここで、転化するものがそれへと転化するところのそれというのは、転化において最初に生ずるものを言う。たとえば、白からの転化の場合には黒ではなくて灰いろを言う。というのは、転化するものは両端のどちらかのうちにななければならないというわけではないからである。)したがって、転化するものがすべて可分割的であることは明らかである。」(出・岩崎訳, pp. 234-235) .

¹⁰ この第三異論と同様の異論が『定期討論集 魂について』第9問題第6異論 (Ed. Leon., t. 24.1, pp. 76-77, ll. 42-56) にも見られる: 「さらには、動物は自分自身を動かすものである。ところで、自分自身を動かすものは二つの部分に分けられる——すなわち一方は動かす部分であり他方は動かされる部分である——こと、『自然学』第八巻で証明されている通りである。ところで、動かす部分とは魂である。しかしながら動かされる部分はたんに質料のみではありません。なぜならただ可能態の内にもみ存在するものは動かされないからであり、それは『自然学』第五巻で述べられている通りである。そしてそれ故に、重い物体と軽い物体は、自分自身の内には運動を有しているながらも、他方で自分自身は動かさない。なぜならそれら [=重い物体と軽い物体] はたんに質料と形相に分けられるだけであるからであり、質料および形相は動かされるものではありません。したがって残るは、動物が魂と他の或る部分——それは

五。さらには、ダマスケヌスが述べているように、神の本質の単純性はあまりにも偉大なので、御言葉が肉と合一するのはただ魂を媒介とすることによってのみであるのが適切なほどである¹¹。故に、単合体 [であること] と複合体 [であること] に即した隔たりは、或るものが媒介なしに結合されうる¹²ことを妨げる。しかるに、理性的魂と身体は、単合体 [であること] と複合体 [であること] に即して最大限に隔たっている。故に、理性的魂と身体は媒介を通じて合一しなければならない。

六。さらには、アウグスティヌスが『*霊と魂について*』で次のように述べている。「真に霊であるところの魂と真に物体であるところの肉は、自らの境界において、すなわち、物体ではないが物体に類似しているところの魂の表象能力を司るもの (fantasticum) と、身体の中で全くもって霊であるところの感覚能力を司るもの (sensualitas) において、容易にかつ適切に結合される」¹³。したがって、魂が身体と結合されるのは二つの媒介——すなわち表象能力を司るものと感覚能力を司るもの——を通じてである。

七。さらには、同書 [= 『*霊と魂について*』] で述べられているように、「魂は非物的であるのだから、自らの身体より精妙な本性を通じて」、すなわち火と空気を通じて、「身体を統御する」¹⁴。ところで、魂は魂が身体と合一するのと同じ理拠をもって身体を統御する。というのも、それによって魂が身体を統御するところのものが欠如していると魂は身体から離れるからであり、それはアウグスティヌスが『*創世記*』逐語註解』第七巻で述べている通りである¹⁵。故に、魂が身体と合一するのは媒

質料と形相から複合されたものである——に分けられるということである。かくして、魂が物的質料と合一するのは或る形相を通じてであるということが帰結する。」。

¹¹ より正しくはペトルス・ロンバルドゥスが典拠。Cf. ロンバルドゥス『*命題集 (Sententiae in IV Libris distinctae)*』第3巻第2区分第2章第1節 (Ed. Brady, t. 2, p. 29, ll. 13-16), 「ヨアンネス・ダマスケヌスは「神の御言葉は知性という媒介を通じて肉と合一した」と述べている。というのも、神の本質は偉大なる精妙さと単純性を有しているので、それが泥土から形作られた身体と合一するのはただ理性的本質を媒介とすることによってのみであるのが適切なほどであったからである。」; ダマスケヌス『*正統信仰論 (De Fide orthodoxa)*』第50章 (Ed. Buytaert, p. 189, ll. 47-52), 「したがって、神の清浄さと肉体の粗雑さとを調停する仲立ちの精神をもって、神の言は肉体と合一する。精神は魂と肉体を主導するものである。〔精神は〕魂より清浄なるものではあるが、神は精神よりもいっそう清浄なるものである。より強いものによって譲歩せしめられるとき、精神は自分の主導能力を発揮する。」(「ダマスコのヨアンネス 知識の泉」小高毅訳、『*中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想*』, 平凡社, 1994年, p. 646)。

¹² レオ版 (p. 34, l. 49) では「*aliqua non possunt coniungi sine medio*」となっているが、仏訳者の Brenet (p. 102, n. 1) が示唆しているように文脈を考慮して「non」を読まなかった。

¹³ Cf. 偽アウグスティヌス『*霊と魂について (De Spiritu et Anima)*』第14章 (PL 40, 789)。

¹⁴ Cf. 同第15章 (PL 40, 791); アウグスティヌス『*創世記*』逐語註解 (De Genesi ad Litteram)』第7巻第19章25節 (PL 34, 364), 「この世界のうちで卓越した物体であり、水や土のような鈍重な受動性でなく、卓抜な能動性をもった光や空気によって、魂はいわば霊的なものにより相似したもののごとくに物体を統治する」(片柳栄一訳、『*アウグスティヌス著作集 第16巻*』, 教文館, 1994年, p. 236); 第3巻第5章7節 (PL 34, 282), 「しかし感覚の力がそのうちにある魂は物体ではなく、より微細な物体を介して感覚を生き生きと働かせるのである。だから魂はすべての感覚において微細な火によって動きをひき起すのであるが、そのすべてにおいて同じ所にまで達するのではない。」(片柳訳, p. 73)。

¹⁵ Cf. 同第7巻第19章25節 (PL 34, 365), 「こうした魂のいわば使者たちがついに、何らかの傷害や混乱によってまったく機能しなくなり、感覚の告知も欠如し、運動の働きもしなくなるなら、魂はいわ

介を通じてである¹⁶。

八。さらには、最大限に異なっているものどもは媒介を通じてのみ結合される。しかるに、可滅的なものと不可滅的なものが最大限に異なっていること、『形而上学』第十巻で述べられている通りである¹⁷。故に、不可滅的なものである人間の魂と可滅的な身体が合一するのは媒介を通じてのみである¹⁸。

九。さらには、或る哲学者が『精気 (spiritus) と魂の違いについて』で述べているように、魂が身体と合一するのは精気を媒介とすることによってである¹⁹。故に、魂が身体と合一するのは媒介を通じてである。

十。さらには、本質という点で相異なるものどもは媒介なしには合一しない²⁰。というのも、そのようなものどもを一つにするような或るものがなければならぬからであり、それは『形而上学』第八巻で明らかな通りである²¹。しかるに、魂と身体は本質

ばその存在理由を失って立ち退く」(片柳訳, p. 236)。

¹⁶ この第七異論と同様の異論が『神学大全』第1部第76問題第7項第1異論 (Ed. Leon., t. 5, pp. 231a) にも見られる: 「アウグスティヌスは『創世記逐語註解』第七巻のなかで、『魂は光 (すなわち火) や気——これらは霊に近いものゆえ——によって身体を管理する。』と述べている。だが火や空気は物体である。してみれば、魂が身体と一つになっているのは何らかの物体の媒介による。」(『神学大全 第6冊』高田三郎・大鹿一正訳, 創文社, 1962年, p. 73)。『神学大全』では、『霊と魂について』には言及されず、『創世記』逐語註解のみが言及されている点は興味深い。

¹⁷ Cf. アリストテレス『形而上学』第10巻 (1058 b 26-29), 「反対のものどもはその種 [形相] において異なっており、そして消滅的なものと非消滅的なもの [不滅なもの] とは反対のものどもである (というのは、欠除は或る限定された意味での無能力性だからであるが)、そうだとすると、消滅的なものと不滅なものとのがその類 [種類] において異なっていることは必然である」(出隆訳, 『形而上学 (下)』, 岩波書店, 1961年, p. 86)。

¹⁸ この第八異論と同様の異論が『定期討論集 魂について』第9問題第18異論 (Ed. Leon., t. 24.1, p. 79, ll. 122-7) にも見られる: 「さらには、隔たっているものどもは媒介を通じてのみ結合される。しかるに、魂と身体は最大限に隔たっていると思われる。というのも、それらの内的一方 [=魂] は非物体的で単純であるが、もう一方 [=身体] は物体的で最大限に複合体だからである。故に、魂が身体と合一するのは媒介を通じてのみである。」

¹⁹ Cf. コスタ・ベン・ルカ『魂と精気の違いについて (De Differentia Animae et Spiritus)』第4章 (Ed. Barach, p. 138), 「また魂は、身体を動かし身体に感覚や生を授けるのに精気を媒介とするが、精気はこうしたことを全く媒介者なしに行う」。

²⁰ Cf. 『神学大全』第1部第3問題第7項主文 (Ed. Leon., t. 4, p. 47), 「本来互いに異なっているところのものが一つに合するということは、それらを結びつけて一たらしめているところの何らかの因によるものであるほかはない」(『神学大全 第1冊』高田三郎訳, 創文社, 1960年, p. 72); 第11問題第3項主文 (p. 111), 「だが種々別々であるところのものが一つの秩序に会するということは、それらが何らか一なるものによって秩序づけられているのでないかぎり、ありえないところでなくてはならない」(高田訳 (第1冊), pp. 202-3); 第65問題第1項主文 (t. 5, p. 148), 「いろいろ異なったものが何らかのことがらにおいてすべて一致とするならば、こうした一致についての何らかの因が、かならず存在しなくてはならない。いろいろ異なったものが自らに即して一致するわけではないのだからである。」(高田・山本訳 (第5冊), p. 3); 第2-2部第171問題第4項主文 (t. 10, p. 372), 「多様なものは、それらがそれによって結びつけられ、それに依存しているような或るものゆえにでなければ必ずしもひとつになることはない」(『神学大全 第23冊』稲垣良典・片山寛訳, 創文社, 2001年, p. 18)。

²¹ Cf. アリストテレス『形而上学』第8巻 (1045 a 8-10), 「およそそれ自らのうちに幾つかの部分を持ち、これらの諸部分は穀粒の集積のごときではなくて、その全体はこれら諸部分とはなんらか別のなものかであるようなものどもにおいては、すべて、そうあるゆえんの原因がある」(出訳 (上), p. 310); トマス・アクィナス『形而上学』註解 第8巻第5講 (Ed. Cathala & Spiazzi, p. 419), 「次のことを考

という点で異なっている。故に、魂と身体が合一できるのは媒介を通じてのみである。

十一。さらには、魂が身体と合一するのは、魂がこのような合一を通じて完成されるためである。なぜなら、形相が質料のためにあるのではなく、むしろ質料が形相のためにあるからである。ところで、魂が身体との合一によって完成されるのは、特に表象にかかわる知性認識 (*intelligere fantasticum*) に関して、すなわち魂が表象から抽象することによって知性認識する限りでのことである。故に、魂は身体と表象を通じて合一するが、その表象は身体の本質にも魂の本質にも属していない。故に、魂が身体と合一するのは媒介を通じてである。

十二。さらには、身体は理性的魂が到来する前に母親の胎内 (*uterus maternus*) において或る形相を有している。ところで、理性的魂が到来するとその形相がなくなると言うことはできない。なぜなら、その形相は無になるわけでもなく、その形相がそれへと帰るようなものを措定することもできないからである。故に、質料において或る形相が理性的魂よりも先在している。

十三。さらには、理性的魂が到来する前の胎児 (*embrio*) において生の営み (*opera uite*) が現われること、『動物論』第十五巻で明らかな通りである²²。しかるに、生の営みはただ魂にのみ由来する。故に、理性的魂が到来する前に別の形相が身体において先在している。そしてその場合には、理性的魂は別の魂を媒介として身体と合一すると思われる。

十四。さらには、『自然学』第二巻で述べられているように、「抽象するものに虚偽はない」のだから²³、それについて数学者が論じているところの物体が或る仕方で存

察しなければならない。複数の部分を有していて、その諸部分の内にある全体がたんに諸部分の集積であるのみならず、むしろ諸部分から構成された或るものでありながらその諸部分そのものとは別のものであるところのものすべては、その諸部分において一性を生じさせるような或るものを有している。」²² Cf. アリストテレス『動物発生論 (*De Generatione Animalium*)』第2巻 (736 a 32-b 1), 「靈魂の「感覺的部分」といったのは、誰でも胚子を「靈魂のないもの」、すなわち、あらゆる意味で「生命の欠如したもの」と見なす者はいないからで、現に動物の精液と胚子とは生きているということ〔靈魂の栄養的部分〕では植物に決して劣らず、或る点までは生殖力もあるのである。そこで、それらが栄養的靈魂を有することは明らかであり (なぜこの靈魂が最初に獲得されなければならないのか、ということはこの論文の靈魂を論じた箇所を見れば分かる、発生が進むにつれて感覺的靈魂をも獲得するが、これこそ動物の動物たるゆえんのものである。)(『動物発生論』島崎三郎訳、『アリストテレス全集9』, 岩波書店, 1969年, p. 161) .

²³ Cf. アリストテレス『自然学』第2巻 (193 b 31-35), 「数学者もまたそれら〔点や線や面や形など〕の研究をその仕事としてはするが、これらの各々を自然的な物体の或る限界として研究しはせず、それらをとくにこうした物体に付帯する属性としてのかぎりにおいて研究もしない。だからまた数学者は、それらを〔その付帯するところの物体から〕切り離しているのである。というのは、それらは思惟の上では運動から切り離されうるものであり、また切り離されても〔その推理に〕なんのまちがひも起こらず、〔結論に〕なんの虚偽も生じないからである。」(出・岩崎訳, p. 50) ; トマス・アクィナス『「自然学」註解』第2巻第3講 (Ed. Leon., t. 2, p. 62), 「他方で数学者たちは、それら〔=数学の対象となるもの〕を知性に即して抽象する場合には、虚偽に陥らない。なぜなら彼らは、それらが可感的質料の外に存在していると考えているわけではなく (というのもそれは虚偽であろうから)、むしろそれらについて可感的質料の考察なしに考察しているからであり、それは虚偽なしに行われうることである。」. なお「抽象するものに虚偽はない (*abstrahentium non est mendacium*)」という言明をトマスは他の著作でも繰り返し用いている. 詳しくは次の通り: 『「命題集」註解』第1巻第30区分第1問題第3項第1異論解答 (Ed. Mandonnet, t. 1, p. 708) ; 『ボエティウス「三位一体論」註解 (*Super Boetium de Trinitate*)』第5

在するのでなければならぬ。故に、物体は可感的なものから分離されないのだから、それは可感的なもの内に存在するということが帰結する。しかるに、物体が物体であるためには、物体性の形相が必要とされる。故に、可感的物体 (*corpus sensibile*) であるところの人間の身体において、人間の魂よりも先に、物体性の形相が少なくとも予め了解される。

十五。さらには、『形而上学』第七巻で述べられているように、定義はすべて諸々の部分を有しており²⁴、定義の諸部分は形相である²⁵。故に、いかなる定義されるもの内にも、複数の形相が存在していなければならない。故に、人間は何らかの定義されるものであるのだから、人間において複数の形相が指定されるのは必然である。そしてかくして、或る形相が理性的魂よりも先在している。

十六。さらには、どんなものであれ有していないものを与えることはない²⁶。しかる

問題第3項第1異論解答 (Ed. Leon., t. 50, p. 150, ll. 300-1) ; 『神学大全』第1部第7問題第3項第1異論 (Ed. Leon., t. 4, p. 75) など。

²⁴ Cf. アリストテレス『形而上学』第7巻 (1034 b 20-22), 「事物の定義はその説明方式であり、説明方式はすべて部分をもっているからして、そして説明方式の各部分が当の事物の各部分に対する関係は説明方式が当の事物に対するがごときである」(出訳(上), p. 260) ; トマス・アクィナス『形而上学』註解第7巻第9講 (Ed. Cathala & Spiazzi, pp. 357-8), 「あらゆる定義は何らかの理、すなわち理を通じて秩序づけられた名称の何らかの複合である。[略]ところであらゆる理は部分を有している。なぜならそれは複合された何らかの言明であり、単純な名称ではないからである。そしてそれ故に、事物の理が事物と関係しているのと同様に、理の部分も事物の部分と関係していると思われる。[略]定義の部分が事物の部分を表示するのは、事物の部分から定義の部分が取られる限りにおいてである。

[略] 類は質料から取られ、種差は形相から取られる一方、種は形相と質料から同時に取られる。」

²⁵ Cf. アリストテレス『自然学』第2巻 (194 b 26-29), 「しかし、他の意味では、事物の形相または原型がその事物の原因と言われる、そしてこれはその事物のそもそもなにであるか[本質]を言い表わす説明方式ならびにこれを包摂する類(たとえば、一オクターブのそれは[その説明方式としては]一に対する二の比、ならびに一般的には[その類としては]数)、およびこの説明方式に含まれる部分[種差]のことである」(出・岩崎訳, p. 54) ; トマス・アクィナス『自然学』註解第2巻第5講 (Ed. Leon., t. 2, p. 69), 「かくして原因のこのような仕方 [=形相因としてのあり方]へと定義において指定されることすべてが還元される」; 『神学大全』第2-1部第18問題第7項第3異論解答 (Ed. Leon., t. 6, p. 134), 「(種)差というものは、それが類を現実的にあらしめるものであるという意味においては、類に対して、あたかも質料に対する形相のごとき位置にある。しかし類がやはり、種に比して、より無条件的でより無制約的であるという意味では種以上に形相的であるとも考えられるのである。『自然学』に、定義の部分は、いずれもともにやはり形相因の領域に帰せられる、という所以である。」(『神学大全』第9冊) 高田三郎・村上武子訳, 創文社, 1996年, p. 385)。

²⁶ Cf. アリストテレス『ソフィスト的駁論について (*De sophisticis Elenchis*)』(171 a 9), 「人が持っているもの、与えうる」という誤謬の原因は、推論と矛盾の両方にある」(納富信留訳, 『アリストテレス全集3』, 岩波書店, 2014年, p. 402) ; アウグスティヌス『自由意志論 (*De libero Arbitrio*)』第2巻第17章45節 (PL 32, 1265), 「どんなものも自分のもたないものを自分に与えることはできない」(「自由意志」泉治典訳, 『アウグスティヌス著作集 第3巻』, 教文館, 1989年, p. 127) ; トマス・アクィナス『命題集』註解第2巻第30区分第1問題第2項第4異論 (Ed. Mandonnet, t. 2, p. 770), 「何ものも自らが有していないものを他のものに与えたり他のものにおいて生じさせたりすることはない」; 『神学大全』第1部第75問題第1項第1異論 (Ed. Leon., t. 5, p. 194a), 「何ものも自己の持っていないものを他に与えないものなること、たとえば、自ら熱くあるのでなければ他を熱することができないごとくである」(高田・大鹿訳(第6冊), pp. 2-3) ; 第2-1部第81問題第3項第2異論 (t. 7, p. 90a), 「なんびとも自らが有しないものを他に与えることはない」(『神学大全』第12冊) 稲垣良典訳, 創文社, 1998年, p. 242) ; 第3部第64問題第5項第1異論 (t. 12, p. 46a), 「なんびとも持っていないものを与えることはない」(『神

に、理性的魂は物体性を有していない。というのも、理性的魂は非物体的だからである。故に、理性的魂は人間に物体性を与えることはない。そのようなわけで、人間は「物体性を有するという」こうしたことを「理性的魂とは」別の形相にもとづいて有しているのでなければならない。

十七。さらには、註釈家アヴェロエスが述べているように、第一質料は普遍的形相 (*forma uniuersalis*) を個別的形相 (*forma particularis*) よりも先に受け取る。例えば、魂を有する物体の形相よりも先に「魂を有さない」物体の形相を第一質料が受け取るような場合等々である²⁷。故に、人間の魂は、最終的で最も種別化された形相であるのだから、「人間の魂以外の」他の諸々の普遍的形相を質料において前提としていると思われる。

十八。さらには、註釈家アヴェロエスが『天体論』で述べているように、質料においては諸次元が元素的形相 (*forma elementaris*) よりも先在している²⁸。しかるに、諸次元は附帯的なものであり、質料においては或る実体形相を前提とする。さもなければ、附帯的な存在 (*esse accidentale*) が実体的な存在 (*esse substantiale*) に先行することになってしまう。故に、単純元素の形相よりも前に「単純元素の形相とは」別の或る実体形相が質料において先在している。したがってそれは、ましてなおさら理性的魂よりも前のことである。

十九。さらには、哲学者アリストテレスによれば、『生成論』にあるように、空気は水よりも容易に火に置換される。それは、空気が或る一つの質——すなわち熱——において火と一致するからである²⁹。故に、空気から火が生じる場合、熱は種において同じでなければならない。もし火の熱と空気の熱が種において異なるとすれば、第一の質が四つだけでなく八つあることになってしまう。というのも、同じ理屈が「熱以外の」他の質 [=寒、乾、湿] にもあてはまるからであり、そういった他の質のいずれもが二つの元素 [=火と空気のこと] において見出されるからである³⁰。故に、もし熱が、種においては同じままだが数においては異なると言うのであれば、空気から火へ

学大全 第41冊) 稲垣良典訳, 創文社, 2002年, p. 242); 第67問題第5項第1異論 (p. 83a), 「自分が持っていないものを(他者に)与えることは誰にもできない」(『神学大全 第42冊) 稲垣良典訳, 創文社, 2003年, p. 64); 『定期討論集 悪について』第4問題第6項第4異論 (Ed. Leon., t. 23, p. 119, ll. 26-27), 「誰も或る者からその者の内にないものを受け取ることはできない」など。

²⁷ Cf. アヴェロエス『アリストテレス「形而上学」大註解 (*Commentarium magnum in Aristotelis Metaphysicae Libros*)』第1巻第17註解 (Ed. Ven., t. VIII, f. 14v, litt. K), 「しかしながら[第一質料は]、まず始めに普遍的形相を受け取り、その後普遍的形相を媒介とすることで、個別的形相に至るまで他の形相を受け取る」。

²⁸ Cf. アヴェロエス『天体論 (*De Substantia Orbis*)』第1章 (Ed. Ven., t. IX, f. 4r, litt. B), 「第一質料からは決して限界づけられていない諸次元を剥ぎ取れない」; 同 (litt. D), 「そしてその形相、すなわち諸次元は、限界付けられない仕方では第一質料において初めに存在しているのだから、[他の実体形相は] 第一質料においてその形相に続いて生じる」。

²⁹ Cf. アリストテレス『生成消滅論 (*De Generatione et Corruptione*)』第2巻 (331 a 7-332 a 2, つまり第4章全体)。なおこの部分についての註解はトマスの『「生成消滅論」註解 (*Sententia Libri De Generatione et Corruptione*)』には欠けている。トマスの註解は第1巻第5章 (322 a 33) で止まっているからである。

³⁰ 熱は火と空気に属し、寒は水と土に属し、乾は土と水に属し、湿は空気と水に属す。もし熱の場合に火と空気の間でその種が異なるとすれば、他の質も同様にそれぞれ別の種が存在することになるということ。

の置換は水から火への置換よりも容易ではなくなってしまう。なぜなら、火の形相が二つの質 [=寒と湿] を、水においても空気においても同様に消滅できることになるからである。故に残るは、熱は数において同じだということしかない。しかるに以上のこと [=空気と火において、熱が種的にも数的にも同じであること] は、或る実体形相——すなわち [空気と火の] 両方において一であり熱の一なる基体を保持するもの——が先在する場合にのみ可能である。というのも、附帯的なものが数において一でありうるのは、基体が [その前に] 一であった場合のみだからである³¹。故に、次のように言わなければならない。単純物体の形相よりも前に、質料においては或る実体形相が予め了解される。したがってそれは、ましてなおさら理性的魂よりも前のことである。

二十。さらには、第一質料は、それ自体に関する限りでは無差別にあらゆる形相と関係している³²。したがって、もし何らかの形相や態勢 (dispositio) が、それを通じて第一質料がこの形相ないしあの形相に固有なものとされるような他の形相や態勢よりも先在していないとすれば、第一質料においてこの形相の方があの形相よりもよりよく受容されるということはないであろう³³。

二十一。さらには、質料が形相と合一するのは、それによって質料が形相の下に存在することができるような能力 (potentia) を通じてである。しかるに、そのような能力は質料の本質と同じではない。というのも、もしそうだとすれば、自らの能力であるところの神³⁴と同等の単純性が存在することになってしまうからである。故に、質料と魂および何であれ他の形相との間には或る媒介が存在する。

³¹ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第1部第29問題第1項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 327b), 「実体はそれ自身によって個体化されるのであり、これに対して、諸々の附帯性が個体化されるのはその基体たる実体による」(『神学大全 第3冊』高田三郎・山田晶訳, 創文社, 1961年, p. 41); 第3部第77問題第2項主文 (t. 12, p. 196b), 「基体は諸々の諸付帯有の個別化の根源である」(『神学大全 第43冊』稲垣良典訳, 創文社, 2005年, p. 128) .

³² Cf. トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第44章 (Ed. Leon., t. 13, p. 370a, ll. 4-7), 「第一質料は、あらゆる物体に共通するものでありながら、或る一つの形相の下でのみ創造されたのであった。ところで、第一質料の内には複数の形相が可能態の内に存在している。」; 第4巻第89章 (t. 15, p. 279b, ll. 26-30), 「第一質料においてあらゆる形相に対して存在する可能態もまた、人間の身体においては魂の能力を通じていわば拘束されたままであることになるだろう。それはその可能態が他の形相の現実態へと還元されるようなことがないようにするためである。」; 『神学大全』第2-1部第9問題第6項主文 (Ed. Leon., t. 6, p. 82b), 「すべての形相への可能態にある第一質料なるものが、何らか特殊な能動者によって原因されることのできないものなるゆえんも、やはりここに存している」(高田・村上訳 (第9冊), p. 224); 第50問題第6項主文 (p. 323b), 「人間の知性は諸々の知性の階梯のうちで最低位にあるがゆえに、あたかも第一質料がすべての可感的な形相にたいして可能態にあるがごとく、すべての可知的なるものにたいして可能態にあり、したがってあらゆることを認識するのに何らかの習慣を必要とする」(稲垣訳 (第11冊), p. 44) .

³³ したがって第一質料は、この形相やあの形相を受容する前に媒介として何らかの形相や態勢を必要とする。まして人間の場合にも、身体は、理性的魂という形相を受容する前に媒介として何らかの形相や態勢を予め必要とする。以上のような帰結が念頭に置かれているのであろう。

³⁴ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第1部第77問題第1項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 236b), 「神の場合にあつては、はたらきの根源たる神の能力が神の本質そのものにほかならない」(高田・大鹿訳 (第6冊), p. 86); 第2項主文 (p. 240b), 「神にいたっては、ここではその本質とは別に如何なる能力も如何なるはたらきも存在しない」(同, p. 93) .

【反対異論】

反対に、

一。『教会教義論』には「人間には二つの魂——すなわち一つは身体を生かす動物的魂でもう一つは理性に仕える霊的魂——があると我々は主張するのではない」とある³⁵。このことから次のように議論が進められる。人間は、動物の類の内にあるのと同様に、魂を有する物体 (*corpus animatum*) の類や物体の類や実体の類の内にある。しかるに、同一の形相——すなわち魂——を通じて人間が動物でもあること、前述の権威から明らかかな通りである。故に、同じ理由で人間は、同一の形相を通じてあらゆる上位の類の内位置づけられる。そしてかくして、質料においては魂よりも前に何らの形相も先在しない³⁶。

二。さらには、神と魂の方が魂と身体よりも隔たっている。しかるに、受肉の神秘において御言葉は魂と無媒介で合一する。故に、ましてなおさら魂の方が身体と無媒介で合一できる。

三。さらには、媒介は「媒介を果たす」両極の双方に与っていなければならない³⁷。

³⁵ Cf. マルセイユのゲンナディウス『教会教義論 (*De ecclesiasticis Dogmatibus*)』第15章 (PL 42, 1216), 「我々は決して、ヤコブその他のシリア人たちの書いているように、「ひとりの人間のうちに二つの魂があり、その一つは動物的な魂で、これは身体に生を与え血と混っているのであるし、いま一つは霊的な魂で、これは理性に仕える」などというものではない。我々は却って、人間において同じ一つの魂が存在しているのであり、これが一方では、身体を自己との交わりによって生けるものにもするし、他方ではまた自らの理性でもって自己自身を規制するのでもある、と考えるものである。」(トマス・アクィナス『神学大全 第6冊』高田・大鹿訳, pp. 52-53 より引用)。偽アウグスティヌス『霊と魂について』第48章 (PL 40, 814) でもほぼ同じことが述べられている。なお『教会教義論』の著者がゲンナディウスであることは既にロンバルドゥスの『命題集』第2巻第8区分第4章第2節 (Ed. Brady, t. 1, p. 2, p. 369, ll. 25-26) で言われていたが、トマス自身も『教会教義論』の著者がゲンナディウスであることを強調している。Cf. 『マタイ福音書への黄金連鎖 (*Catena Aurea in Mattheum*)』第1章第16節 (Ed. Guarienti, t. 1, p. 20); 第19章第21節 (p. 286); 『第十二任意討論 (*Quodlibet XII*)』第6問題第2項主文 (Ed. Leon., t. 25.2, p. 407, ll. 1-7), 「第二に、魂が媒介に由来するのかどうか [が問題となる]。[略] アウグスティヌスはこの問題について決定的なことを述べておらず、むしろ未決定のままにしている (『教会教義論』では決定的なことが述べられているが、この本はアウグスティヌスではなくゲンナディウスによるものである)。」

³⁶ この第一反対異論と同様の反対異論が『神学大全』第1部第76問題第3項反対異論 (Ed. Leon., t. 5, p. 220b) にも見られる。そこでは同じく『教会教義論』が引用されている。以下の箇所も同様: 『対異教徒大全』第2巻第58章 (Ed. Leon., t. 13, p. 410b, ll. 44-52); 『定期討論集 魂について』第11問題反対異論 (Ed. Leon., t. 24.1, p. 98, ll. 148-155)。

³⁷ Cf. アリストテレス『トピカ (*Topica*)』第4巻 (124 a 6-7); 『自然学』第2巻 (224 b 30-31); 『靈魂論』第2巻 (424 a 6-7); 『形而上学』第10巻 (1057 a 19-20); 『政治学 (*Politica*)』第4巻 (1294 b 18); トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第7項第3異論 (Ed. Leon., t. 24.2, p. 74, l. 14); 第11項第4反対異論 (p. 117, ll. 176-177); 『定期討論集 真理について (*Quaestiones disputatae de Veritate*)』第14問題第3項第5異論 (Ed. Leon., t. 22.3, p. 445, ll. 39-41); 『定期討論集 悪について』第16問題第1項第6異論 (Ed. Leon., t. 23, p. 279, l. 57); 『神学大全』第1部第91問題第1項第3異論解答 (Ed. Leon., t. 5, p. 391); 第2-1部第59問題第1項第1異論 (t. 6, p. 380); 第2-2部第1問題第2項反対異論 (t. 8, p. 11); 第19問題第8項第3異論 (p. 144); 第179問題第2項第2異論解答 (t. 10, p. 422); 第3部第11問題第5項主文 (t. 11, p. 163); 第39問題第2項第2異論 (p. 389); 『自然学』註解』第5巻第1章第1講 (Ed. Leon., t. 2, p. 230) など。

しかるに、部分的には物的だが部分的には霊的であるようなものは全く存在しえない。故に、魂と身体の間には全く媒介が入り込むことができない。

四。さらには、教師ロンバルドゥスが『命題集』第二巻第一区分で述べているように、魂の身体に対する合一は、それによって至福なる魂が神と結合されるところの至福なる合一の証し (exemplum) である³⁸。しかるに、そのような結合は媒介なしに生じる。故に、かの合一 [=魂の身体に対する合一] もそうである [=媒介なしに生じる]。

五。さらには、哲学者アリストテレスが『靈魂論』第一巻で述べているように、身体が魂を含み込んでいるのではなくむしろ魂が身体を含み込んでいる³⁹。また、同書に対して註釈家アヴェロエスが述べているように、魂は身体の連続性 (continuitas) の原因である⁴⁰。しかるに、身体の連続性は、それを通じて身体が身体であるところの実体形相に依存している。故に、理性的魂そのものは、人間においてはそれによって身体が身体であるところの形相である。

六。さらには、理性的魂の方が単純元素の形相よりも効力があり力がある。しかるに、単純な物体が、それが何であれ実体的な仕方であるところのものを有するのは、単純元素の形相に由来する。故に、人間の身体はましてなおさら [それが何であれ実体的な仕方であるところのものを有することが] 魂に由来する。そしてかくして、形相や媒介は全く先在していないのである。

【主文】

解答。次のように言わなければならない。この問題の真理は、前述の問題 [=本書第二項] にいくらか依存している。すなわち、或る人々が主張したように、もし理性的魂

³⁸ Cf. ロンバルドゥス『命題集』第2巻第1区分第6章第3節 (Ed. Brady, t. 1, p. 2, p. 334, ll. 15-17), 「それ故に神は、魂が身体と合一することを欲した。それは神が、人間の創成において、神と霊の間での至福なる合一の新たな証しを示すためであった。」。

³⁹ Cf. アリストテレス『靈魂論』第1巻 (411 b 6-8), 「すると、もし魂がその自然本性からして部分に分かたれていなければ、魂を一つに統合するのは何であるのか。というのも、少なくとも身体ではないことは確かだからである。なぜなら、むしろ反対に、身体を統合するのが魂であると思われているからである。ともかくも、魂が離れ去ると、身体は消散し腐敗してしまう。」(中畑訳, p. 60); トマス・アクィナス『靈魂論』註解 第1巻第14章 (Ed. Leon., t. 45.1, p. 65, ll. 86-89), 「しかるに、身体が魂と合一したり魂を含み込んだりするのではなく、むしろ魂が身体を含み込んでいる。例えば、われわれが見ているように、魂が身体から「離れ去ると」、身体は欠損し「腐敗してしまう。」; 『神学大全』第1部第52問題第1項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 20), 「けだし、非物的実体が自らのちからによって物的な事物に触れる場合、この事物を包むのであって、この事物によって包まれるのではない。魂が身体においてあるのも、「包むもの」としてであって「包まれるもの」としてではないのである。」(『神学大全 第4冊』高田三郎・日下昭夫訳, 創文社, 1973年, p. 166)。

⁴⁰ Cf. アヴェロエス『靈魂論』大註解 (Commentarium magnum in Aristotelis De Anima Libros)』第1巻第90註解 (Ed. Crawford, p. 121, ll. 26-33), 「以上のこと [=身体が魂を一つに統合するものではないということ] をアリストテレスは「むしろ反対に、身体を統合するのが魂であると思われている」と述べた際に言おうとしたのであった。すなわち、なぜなら、われわれがこの点について自然に抱いている見解が、この「身体が魂を一つに統合するという」見解とは反対のものだからである。すなわち、魂の方が尊いものなので、魂の方が身体との結合の原因でありその数における一性の原因なのであって、身体の方が魂との結合の原因であるわけではない。というのも、存在するものがすべて一なるものであったり連続するものであったりするの、自らの質料を通じてではなく、むしろ自らの形相を通じてだからである。」。

が動原 (motor) としてただ力による接触 (contactus virtualis) を通じてのみ身体と合一するならば⁴¹、魂と身体の間には多数の媒介が存在し、魂と第一質料の間にはそれよりも多くの媒介が存在すると述べることに何ら差し支えはなかった。それに対して、もし魂が形相として身体と合一すると措定されるならば⁴²、魂は身体と無媒介に合一すると述べるのが必然である。実際あらゆる形相は、実体形相であれ附帯形相であれ、質料ないし基体と合一する。すなわち以下の通りである。各々のものは、有 (ens) であるということに即して一である⁴³。ところで、現実態にある有はそれぞれ、実体的な存在に即

⁴¹ Cf. トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第6項主文 (Ed. Leon., t. 24.2, p. 70, ll. 244-7), 「実際にプラトンは、上述の通り、人間の身体が魂を有するものとなるのは、ただ魂が動原として身体と合一する限りでのことであるとも述べたのであった」。

⁴² Cf. 同書第2項反対異論 (Ed. Leon., t. 24.2, p. 23, ll. 143-4), 「魂が身体の形相であることは、『靈魂論』第二巻において措定されている魂の定義を通じて明らかなる通りである」(石田隆太訳、『筑波哲学』第22号, 2014年, p. 140)。

⁴³ Cf. アリストテレス『形而上学』第4巻 (1003 b 22-32), 「ところで、もし存在と一とが、つぎのような意味で同じものであり一つの実在に関するものであるとすれば、すなわち、これら両者が、あたかも原理と原因とがそうであるように互いに含み合っているという意味で、そうなのであって、それらが同じ一つの説明方式で表わされるからとの意味ではなしにだすとすれば (ただし、この意味で同一だと解しても別に差しさわりのない、あるいはこう解した方がここでは好都合かも知れないが)、——ただし、「一つの〔ひとりの〕人間」と言うのも、ただ「人間」と言うのも同じことであり、「存在する人間」と言うのも、ただ「人間」と言うのも同じことであり、またこれらを重ね合わせて「一つの人間で一つの存在する人間」という言い方をしてもなんらの異なるものをも示しはしない (なおこの存在と一との両者が、生成の場合にも消滅の場合にも同じく不可分離的であることは言うまでもない)。また同様に、一の場合でも、一を加えて「一つの存在する人間」と言っても別に「存在する人間」と異なるなものをも示しもしない。したがって、明らかにこれら両者の場合にはこのような加言は同じ事実を示すのみであり、一は存在と離れた別のなにものでもない。」(出訳(上), p. 114-5); 第10巻 (1054 a 13-19), 「そして、或る仕方では一〔ひとつ〕というのが存在〔ある〕ということと同じ意味をもっているということは、つぎの諸事実からして明らかである、すなわち、一の諸々の意味が諸々の述語的存在のそれぞれに対応しているとともに、一つということそのことが〔あるということそのことと同じく〕いずれの述語的存在のうちにも含まれていない (たとえば、一つということそのことは、なにであるとして述語されるあるもの〔実体としての存在〕のうちにも、どのようにあると言われるあるもの〔性質としての存在〕のうちにも、含まれていない、しかもこれらのものに対して、あるということそのことがそうであるのと同じ関係をもっている) という事実によって、また〔たとえば同じ一個の人間について言う場合に〕これを「一つの人間」と述語しても、たんに「人間」と述語するのと同じで、〔実質的には〕他になにものをも加えはしない (それはあたかも、「ある」という語を実体や性質や量のうえに加えても、〔実質的には〕別に他のなにものをも加えないのと同じである) という事実によって、また、各々のものがそれぞれ一つであることは、まさにそれぞれがその各々であることにはかならないという事実によっても、明らかである。」(出訳(下), pp. 61-62); 第11巻 (1061 a 15-18), 「また、存在する事物が存在に帰せられようと一に帰せられようと、それはどちらでも差支えない。というのは、たとえこれらが同じではなくて異なっているとしても、すくなくもこれらは相互に换位可能だからである。すなわち、一はなんらかの意味では存在であり、存在はまた一であるから。」(p. 98); ポエティウス『エウテュケスとネストリウス駁論 (Liber contra Eutychem et Nestorium)』ないし『二つの本性について (De duabus Naturis)』第4章 (PL 64, 1364 A), 「一なるものでないものは、総じてまた存在することもありえない。存在は一と交換可能であり、なんであれ一なるものは存在する。」(坂口ふみ訳、『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』, 平凡社, 1993年, p. 211); アルベルトゥス・マグヌス『ディオニュシオス「神名論」註解 (In Dionysii De divinis Nominibus)』第13章 (Ed. Colon., t. 37.1, p. 435, ll. 61-63), 「さらには、哲学者アリストテレスが『形而上学』第四巻で述べているように、有と一は事物という点で同じものである。ところで、事物という点で同じようなものは互いに置換される。故に、一と有は置換可能である。」;

してであれ附帯的な存在に即してであれ、形相を通じて存在する。それ故に、形相はすべて現実態であり、そこから帰結することには、形相はすべて一性の理拠であり、或るものが一であるのはその理拠による。したがって、それによって質料がその形相を通じて存在を有するところの或る別の媒介が存在すると述べることはできないのと同様に、形相を質料ないし基体と合一させるような或る別の媒介が存在すると述べることはできない。したがって、魂が身体の形相である限りは、魂と身体の間には媒介は全く存在できないが、それに対して、魂が動原である限りは、そこで [=魂と身体の間で] 多数の媒介を措定することには何ら差し支えはない。というのも、魂が心臓を通じて他の四肢を動かし⁴⁴、また精気を通じて身体を動かしていることは明白だからである⁴⁵。

『形而上学』註解 (*Metaphysica*)』第4巻第1論考第4章 (Ed. Colon., t. 16.1, p. 165, ll. 36-37) , 「ところで、有である限りで有であるものの中で、第一のものは一であり、それは有と置換される。」; ボナヴェントゥラ『命題集』註解 (*Commentaria in quatuor Libros Sententiarum*)』第1巻第24区分第1項第2問題第1異論 (Ed. QR, t. 1, p. 423) , 「有と一は置換される」こと、哲学者アリストテレスとポエティウスが主張している通りである。しかるに、[或るものが] 有と言われるのは実体に即してである。故に、[或るものが] 一もまたそうである。」; 第31区分第2部第2項第3問題第1異論 (p. 548) , 「有と一は置換されるのだから、故に一性 (unitas) と本質 (essentia) もまた [置換される]。しかるに、本質は [父、子、聖霊の] いかなるものにも固有化されえない。故に、一性もまたそうである。」; トマス・アクィナス『命題集』註解』第1巻第19区分第5問題第1項第3異論解答 (Ed. Mandonnet, t. 1, p. 488, ll. 37-43) , 「<真>は<善><一>と同様に、<現体>に付け加えるところがある。しかしそれらのいずれも、付加するのは<現体>を局限する或る限定相 (ないし種差) ではなく、凡ての<現体>に随伴する意味層である。すなわち、<一>は不可分割性の、<善>は目的の、<真>は認識への関係の、意味層をそれぞれ付け加える。それ故に、これら四者、<現体>、<善>、<一>、<真>は相互に可換的な概念をなす。」(「ペトルス・ロンバルドゥス命題集註解 第一巻第十九篇第五問」, 『真理論』花井一典訳, 哲学書房, 1990年, p. 200-2); 『定期討論集 真理について』第1問題第8項第5反対異論 (Ed. Leon., t. 22.1, p. 27, ll. 92-93) , 「真は有と置換されるように、一も有と置換され、またその逆でもある」(「真理について (真理論 第1問題)」山本耕平訳, 『聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要』, 第7号, 2004年, p. 115); 第22問題第1項第5異論 (t. 22.3, p. 612, ll. 43-44) , 「一と真と善は有と等しく置換される」(「善の欲求について (真理論 第22問題)」山本耕平訳, 『人間文化研究所紀要』, 第14号, 2009年, p. 175); 『対異教徒大全』第2巻第40章 (Ed. Leon., t. 13, p. 360b, ll. 3-5) , 「各々のものは、自らにおいて不可分割であり他のものからは区別されたものとして一となる限りで、有となる」; 『定期討論集 靈的被造物について』第9項 (Ed. Leon., t. 24.2, p. ll. 355-356) , 「各々のものは同じことに即して一であり有である」; 『神学大全』第1部第6問題第3項第1異論 (Ed. Leon., t. 4, p. 68) , 「一は有と置換されるし、同じくまた善も、前述のごとく、有と置換される。然るに、アリストテレスによって『形而上学』第四巻に示されているごとく、有はすべて、自らの本質によって一たるのである。それゆえ、有はすべて、自らの本質によって善たるのである。」(高田訳 (第1冊) , p. 119); 第76問題第1項主文 (t. 5, p. 209) , 「ものは、それがやはり一であるというまさしくその仕方において有たる」(高田・大鹿訳 (第6冊) , p. 39); 第3部第17問題第2項反対異論 (t. 11, p. 222) , 「いかなるものも、それが存在するものと言われることにもとづいて、一と言われる。なぜなら、一と存在するものは置き換えられるからである。」(『神学大全 第29・30・31冊』稲垣良典訳, 創文社, 2010年, p. 54); 第35問題第5項第3異論解答 (p. 357) , 『形而上学』において言われているように、「一」と「在るもの」は相互にともないあう」(稲垣訳 (第33・34冊) , p. 103) など。

⁴⁴ Cf. アリストテレス『動物部分論 (*De Partibus Animalium*)』第3巻 (666 a 11-14) , 「快樂や苦痛や総じてあらゆる感覚の動は、明らかに、心臓から始まり、心臓で終わっている。このようであることもまた、理にかなっている。なぜなら、可能なら、始原は一つでなければならないからだ。」(坂下浩司訳, 『アリストテレス 動物部分論・動物運動論・動物進行論』, 京都大学学術出版会, 2005年, p. 216); トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第9問題第6異論解答 (Ed. Leon., t. 24.1, p. 84, ll. 422-7) , 「そして同様に、心臓は本性的に自分に固有の運動によって動く。とはいえ、このことに対しては血液によ

しかしながらその場合、魂に固有の基体は何か、すなわち質料が形相に対するようにして魂に対して関係づけられるような基体は何かということについて疑問が残る。実際

って引き起こされる氣息の還元もまたもに行われるのであって、この氣息によって心臓が膨張したり収縮したりすること、アリストテレスが呼吸について扱っている箇所述べている通りである。」；第13 異論解答 (p. 85, ll. 476-81)、「心臓は、それを通じて魂が身体の他の部分を動かすところの第一の器官である。そしてそれ故に、その心臓を媒介とすることによって、魂は動原として残りの部分と合一する。とはいえ、形相としては、それ自体でかつ無媒介に、魂は身体の各部分と合一する。」；『対異教徒大全』第2 卷第72 章 (Ed. Leon., t. 13, p. 457b, ll. 25-33)、「魂は身体の特定の部分にあると語った哲学者たちがいた。たとえば、アリストテレス自身が『動物の運動の原因について』において魂は心臓にあると語っている。それは魂の諸能力のうちの或るものが身体その部分に帰属させられているからである。実際、その書物でアリストテレスが問題としている運動力は、主要には心臓にあるのであって、心臓を通じて魂は身体全体に運動や他の同様のはたらきを広げているのである。」(川添訳, pp. 151-3)；『心臓の運動について (*De Motu Cordis*)』(Ed. Leon., t. 43, pp. 128-9, ll. 113-79)、「アリストテレスが『動物運動論』で証明しているように、あらゆる他の四肢の運動は心臓の運動から原因されているのだから、他の運動はたしかに意志的なものでありうるが、第一の運動である心臓の運動は本性的なものである。[略]ところで、実際のところ心臓の運動は、動物の内にあるあらゆる運動の始まりである。それ故に、アリストテレスは『動物部分論』第三巻で次のように述べている。「快楽や苦痛や総じてあらゆる感覚の運動は、ここから、すなわち心臓において始まり、そしてこの心臓で終わると思われる」。それ故に、心臓があらゆる運動の始まりでありまた終わりでもあるために、たんに何らかの円環的な運動ではなく、むしろ円環的な運動に類似した運動、すなわち押すことと引くことから複合された運動を心臓は有している。」；『神学大全』第1 部第20 問題第1 項第1 異論解答 (Ed. Leon., t. 4, p. 252)、「感覚的欲求の働きには常に何らかの身体的な変化が伴うのであり、なかでも著しいのは、動物の運動の第一の根源たる心臓の部分におけるそれである」(『神学大全 第2 冊』高田三郎訳, 創文社, 1967 年, p. 196)；第2-1 部第38 問題第5 項第3 異論解答 (t. 6, p. 260)、「身体がよい配置であると、それは必ず、身体的な運動の始原および終極としての心臓へと、ある仕方でも横溢するのであって、その点、アリストテレスの『動物運動原因論』に述べられている通りである」(『神学大全 第10 冊』森啓訳, 創文社, 1995 年, p. 279)；第2-2 部第44 問題第5 項主文 (t. 8, p. 335)、「肉体の心が肉体の運動すべての根源であるごとく、意志も、また、そして、愛の対象たる究極目的への意図であるかぎりにおいては特に、あらゆる霊的な諸運動の根源なのである」(『神学大全 第17 冊』大鹿一正・大森正樹・小沢孝訳, 創文社, 1997 年, p. 150) など。⁴⁵ Cf. アリストテレス『動物運動論 (*De Motu Animalium*)』第10 章 (703 a 6-22)、「一方で、動かされるのではあるが、動かすことは自然本性的なことではないものは、それとは別の力によって受動することがありうる。他方で、動かすものは、或る力つまり強さをもつことが必然的である。しかるに、すべての動物は、明らかに生来の氣息をもっており、これによって強さももっている——それで、生来の氣息の保持とはいかなるものであるかが、他の諸論考で述べられた——。また、ちょうど、関節における点、つまり、動かすのではあるが動かされるものが、動かされえないものと結ぶ関係と同様の関係を、生来の氣息は、魂的な始原と結んでいるようだ。そして、その始原は、或る動物にとっては心臓にあり、別の動物にとっては心臓の類比物においてあるので、それゆえに、生来の氣息も明らかにそこにある——それで、氣息が常に同じものであるのか、それとも常に別のものになるのかは、別に議論しよう。というのは、他の諸部分についても、同じ議論が当てはまるからである——。また、動かさうものであること、つまり、強さを動物に与えることに対して、生来の氣息は、明らかに、うまく生まれについている。そして、運動のはたらき方は押すことと引くことであり、したがって、運動の道具は膨らむことと縮むことが可能である必要がある。しかるに、氣息の自然本性は、そのようなものなのである。」(坂下訳, pp. 417-8)；『神学大全』第1 部第76 問題第7 項第1 異論解答 (Ed. Leon., t. 5, p. 231)、「動かすちからの第一の「用具」が精気であることはアリストテレスが『動物運動原因論』にいうごとくである」(高田・大鹿訳 (第6 冊), p. 76)；第2 異論解答 (同)、「精気が除かれると魂の身体との合一が失われるのは、それが媒介だからではなく、却って、「身体がそれによってこのような合一に適せしめられているところの態勢」が取り去られるからにはかならない——。精気は、ただし、運動の第一の「用具」「器官」として、動かすことにおける媒介をなすものではある。」(同)。

この疑問をめぐる二つの見解が存在する。すなわち [一つには]、次のように主張した人々がいる。同じ個体の内にそれらの内の一つが他の実体形相によって担われるような多数の実体形相が存在していて⁴⁶、第一質料は、最終的な実体形相の直接の (*immediatum*) 基体でなく、むしろ媒介的形相を媒介とすることによってその最終的な実体形相の基体となるのだからして、[第一の] 形相の下にある限りでの質料そのものは第二の形相に近

⁴⁶ Cf. アリストテレス『靈魂論』第2巻 (413 b 24-29) , 「知性すなわち観想する能力をめぐるは、まだ何も明確とはなっていないにせよ、魂のうちでも以上の諸能力とは異なる何らかの<類>を構成するように思われる。そしてこれだけが、ちょうど可滅的なものから永遠なものが分離されるのと同様な意味で、他の能力から分離されることが可能である。けれども魂の他の部分については、以上の議論から明らかのように、ある人々が主張するような意味で離在するわけではない。」(中知訳, p. 72) ; トマス・アクィナス『『靈魂論』註解』第3巻第1章 (Ed. Leon., t. 45.1, p. 202, ll. 42-47) , 「アリストテレスは、[魂の知性的部分が]「大きさに即して」分離可能であると述べることによって、それが基体という点で分離可能であるということを言おうとしているが、それはプラトンのことが[念頭にある]からである。すなわちプラトンは、魂の諸部分は基体という点で互いに分離されていると指定した上で、それら諸部分対して身体の相異なる部分にある器官を宛がったのである。」; 第8章 (p. 243, ll. 266-73) , 「知性の指図がないままに、恐れることへと「心臓が動かされる」ことがあり、またさらに「もし快いものが」欲求を動かす場合にも、心臓とは別に動かされるような「或る部分が」あることになるであろう (そしてこうしたことをアリストテレスが述べるのは、プラトンの見解の故にである。すなわちプラトンは、魂の諸部分は基体という点で区別されると指定したので、恐れるということがそれに属するところの怒情的部分は心臓の内にあり、欲情的部分は例えば肝臓の内にあるといったように心臓とは別の身体の部分の内にあるとした)。」; 『対異教徒大全』第2巻第58章 (Ed. Leon., t. 13, p. 409a, ll. 4-6) , 「プラトンは次のように主張している。われわれにおいて知性的魂、栄養摂取的魂、それに感覚的魂は同じ魂ではない。」(川添訳, p. 29) ; 『神学大全』第1部第76問題第3項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 220) , 「プラトンは、一つの身体のうち、その器官についてもそれぞれ区別されているごとき種々の魂が存在すると考え、生の種々たるはたらきをこれらの魂にそれぞれ帰属せしめた。彼はすなわち、栄養摂取的な力は肝臓にあり、欲情的な力は心臓にあり、認識的な力は脳にあると説いた。」(高田・大鹿訳 (第6冊) , p. 53) . 魂の異なる能力が身体の別々の部分に位置づけられることを述べるプラトンの直接の言説は『テイマイオス』(69 C - 72 B) に見られる。カルキディウスによる当該箇所のアテン語訳がないことから、トマス自身は以上のようなプラトンの見解をプラトン以外の書物によって受容したと考えられる。Cf. アヴィセンナ『靈魂論 (*Liber de Anima seu Sextus de Naturalibus*)』第5部第7章 (Ed. Van Riet, pp. 156-157, ll. 70-83) , 「また魂を多であるとする人々は論拠を挙げてこう述べた。どうして我々は、すべての魂が単一の魂であると言うことができよう。我々が植物を見れば、それに欲望的魂はそなわっていても——すなわち、我々がこの章で言及した欲望的魂である——知覚し感覚し識別する魂はそれにそなわっていないのだから、疑いもなくこの魂はあの魂ではなく、それ自身によって独立しているものである。さらに我々が動物を見れば、それに感覚的憤激的魂はそなわっていても、そこに理性的魂はまったくない。するとこの獸的魂は単独の魂である。これらのものが人間のなかに集まっているとき、本質の異なる種々さまざまな魂がそのなかに集まっており、そのなかには互いに離在的なものもあるのを我々は知る。だからこそ、それらの魂の各々がそれに特有の場所をもち、識別の魂には脳が、動物的な憤激的魂には心臓が、欲望的魂には肝臓があるようになっていく。」(『魂について』木下雄介訳, 知泉書館, 2012年, p. 290) ; アヴェロエス『『靈魂論』大註解』第1巻第7章 (Ed. Crawford, p. 10, ll. 11-15) , 「アリストテレスは、「そして魂は分割可能なものであるかどうかとも考察しなければならない」と述べた。すなわち、基体に即して分割可能であるか、あるいは基体の分割を通じては分割不可能であるかどうか、ということである。というのも、知性的力は脳の内にあり、欲情的力は心臓の内にあり、本性的力、すなわち栄養摂取的力は肝臓の内にあるとプラトンが主張していたからである。」; 第90章 (p. 121, ll. 8-13) , 「プラトンの見解によれば、四肢の分割に即して魂は本質的に身体の内では分割されており、その四肢の内では [それぞれの] 魂は自らの相異なる働きをなし、また、魂はいかなる四肢においても共通していないので、知性認識する部分は脳の内にのみあり、欲求する部分は心臓の内にのみあり、栄養摂取的部分は肝臓の内のみある」。

接した基体であり、このようにして最終的な形相にまで続いていく。したがってその場合、理性的魂の近接した基体は感覺的魂によって完成された身体であり、この身体に対して理性的魂は形相として無媒介に合一する。もう一つの見解は以下の通りである。或る一つの個体の内には実体形相は一つしかない⁴⁷。そしてこのことによれば、実体形相——すなわち人間の魂——を通じてこの個体は、人間であることのみならず、動物であること、生物⁴⁸であること、物体や実体や有であることも有していると言わなければならない。そしてその場合、人間の魂以外のいかなる他の実体形相もこの人間において先行せず、そこから帰結することには、いかなる附帯形相もまた先行しない。なぜなら、もしそうだとすれば [=附帯形相がこの人間において人間の魂に先行するとすれば]、第一質料が実体形相よりも先に附帯形相を通じて完成されると言わなければならないが、それは不可能である。というのも、附帯的なものはすべて実体において基礎づけられなければならないからである⁴⁹。ところで、以上の二つの見解の相異は次のことに由来している。実在界 (*natura rerum*) についての真理を探究するために可知的な理拠 (*ratio intelligibilis*) から出発した——そしてこれはプラトン主義者に固有なことであった——人々がいるのに対して、可感的な事物から出発した——そしてこれはアリストテレスの哲学 (*philosophia Aristotilis*) に固有なことであった——人々がいるのである。以上はシンプリキウスが『範疇論』註解』において述べている通りである⁵⁰。

プラトン主義者は、類と種の何らかの秩序について、上位のものは下位のものなしに常に知性認識されうると考えた。例えば、人間はこの人間なしに、動物は人間なしに [知性認識されうる] といったように続いていく⁵¹。さらにプラトン主義者は、何であれ知

⁴⁷ Cf. アリストテレス『靈魂論』第1巻 (411 b 6-27) ; トマス・アクィナス『「靈魂論」註解』第1巻第14章 (Ed. Leon., t. 45.1, pp. 65-66, ll. 76-134) ; 『神学大全』第1部第76問題第3項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 221) , 「人間は生物たることを自育的魂から、動物たることを感覺的魂から、そして人間たることを理性的魂からというふうに、それぞれ別な魂から得ているのであるとしたならば、人間は端的な意味における一ではないことにならざるをえないのであって、この点ちょうどアリストテレスが、『形而上学』第八巻のなかでプラトンへの反駁として、もし動物のイデアと二足のイデアとがそれぞれ別なものであるとするならば、「二足動物」は端的な意味における一ではありえないこととなると論じているのと軌を一にする。彼が『デ・アニマ』第一巻において、身体のうち種々の魂を考えるひとびとに反対して、『何がそれらを含むのであるか』、つまり、それらに基づいて一なるものを生ぜしめるところのものは何か、という質問を提起しているのもやはりこのゆえにほかならない。」(高田・大鹿訳(第6冊), p. 54).

⁴⁸ Guldentops & Steel (p. 190) の提案に従い, *unum* を *uium* と読み替える。仏訳者 Brenet はこの提案を踏まえていることを明記している。なお Keeler (p. 40, l. 18) の版は *vivum* としている。

⁴⁹ 「附帯的なものは実体において基礎づけられる (*accidens fundatur in substantia*) 」という言明は、「附帯的なものの存在は内在である (*accidentis esse est inesse*) 」と同じ意味である。

⁵⁰ Cf. シンプリキウス『「範疇論」註解 (*In Praedicamenta Aristotelis*) 』序文 (Ed. Pattin, t. 1, pp. 8-9, ll. 73-83) , 「アリストテレスは決して明証性から逸脱しようとしなかった。ちなみに確信することに対する明証性というものには二つある。まず一つは知性に由来するものである一方、もう一つは感覚に由来するものである。[略]ところで、アリストテレスはいつでも、自然から逸脱しようとはしなかったが、自然を超えたことを自然との関係に即して探究している。それは、神のごときプラトンが、ピュタゴラス学派の慣習に則って自然のことを、それが自然を超えたことに与っている限りで探究しているのとはちょうど逆である。」

⁵¹ Cf. ボエティウス『ポルピュリウス「イサゴギー」註解 (*In Porphyrii Isagogen*) 』第2註解第1巻第11章 (PL 64, 85 B) , 「類も種もそれらのことが思考される時には、それら類や種がその内にあるところの個別のものからそれら類や種の類似が集められる。例えば、相互に類似していない個別の人間から

性において抽象されているものは事物においても抽象されていると考えた。さもなければ、もしいかなる抽象された事物も抽象を行う知性に対応していないとすれば、抽象を行う知性は誤っているか空虚なものであるかのいずれかであると考えたからである⁵²。

人間性の類似が集められる。そしてその類似は、それについて精神が思考し真なる仕方では知られた場合には、種となる。さらに、それら相異なる種について考察された類似で、種においてかあるいは種に属する個においてのみありうるようなものが類をなすのであるが、これらは実際のところ個別のものの中にあり。」；トマス・アクィナス『「自然学」註解』第2巻第3講 (Ed. Leon., t. 2, p. 62) , 「より先なるものはより後なるものなしに知性認識できるのであって、その逆ではない。それは、動物が人間よりも先であり、そして人間がこの人間よりも先である (人間は付加によって動物と関係しており、この人間は付加によってこの人間と関係しているが故に) ということから明らかな通りである。そしてそれ故に、人間は動物について知性認識されることには属さず、またソクラテスは人間について知性認識されることには属さない。それ故に、動物は人間なしに知性認識でき、そして人間はソクラテスおよび他の個人なしに知性認識できる。そしてこれが普遍を個別から抽象するということである。」。

⁵² Cf. アリストテレス『形而上学』第1巻 (987 b 7-18) , 「プラトンは、あの別種の存在をイデアと呼び、そして、各々の感覚的事物はそれぞれその名前のイデアに従いそのイデアとの関係においてそう名づけられるのであると言った。けだし、或るイデアと同じ名前をもつ多くの感覚的事物は、そのイデアに与かることによって、そのように存在するというのであるから。ところで、ここに「与かること」と言ったこの言葉だけはかわった点である。というのは、ピタゴラスの徒は存在する事物がそのように存在するゆえんをば数に「まねること」によってであると言っているが、それをプラトンは、この言い方だけ変えて、「与かること」によってとしているのであるから。しかしとにかく、エイドス [すなわちイデア] に与かるとかまねるとかいうことはいったいなんのことか、——このことについては、かれらはこれを共同の研究課題として我々に残した。／だがプラトンは、さらに感覚的事物とエイドスとのほかに、これら両者の中間に、数学の対象たる事物が存在すると主張し、そしてこの数学的諸対象をば、一方、それらが永遠的であり不変不動である点では感覚的事物と異なり、他方、エイドスとは、数学的諸対象には多くの同類のものがあるのにエイドスはいずれもそれぞれそれ自らは唯一単独であるという点で異なるとしている。」 (出訳 (上) , pp. 46-47) ; トマス・アクィナス『「形而上学」註解』第1巻第10講 (Ed. Cathala & Spiazzi, pp. 45-49) ; ボエティウス『ポルピュリウス「イサゴギー」註解』第2註解第1巻第10章 (PL 64, 84 AB) , 「そして再び、上述の問いが問題にしていたように、それら [類や種] の本性とは何であるかということが探究されなければならない。そしてもし、事物から類などの概念がたしかにとられるとして、概念の基体となるような事物が存在しなければ、概念が空虚であることは必然である。概念がたしかに事物からとられるとしても、事物が存在するわけではないからである。つまりところ [存在するのとは] 別の仕方でも事物が知性認識されることは誤りなのである。」；第11章 (85 D - 86 A) , 「たしかに類と種が自存している仕方に対して、それらが知性認識される仕方は別のものであり、またそれらは非物的であるが、可感的なものと結合して可感的なものの中に自存している。さらにそれらは、それ自体で自存しかつ他のものの中には存在を有さないものとして知性認識される。しかしながらプラトンは、類や種などは普遍として知性認識されるのみならず、むしろまたそれらは存在し物体に対して自存していると考えている。それに対してアリストテレスは、それらはたしかに非物的で普遍であると知性認識されるが、可感的なものの中に自存していると考えている。」；アベラルドゥス『ポルピュリウス註釈 (Glossa super Porphyrium)』 (Ed. Geyer, p. 25, ll. 15-32) , 「だが、抽象によるこうした理解は、物を、それが存立しているのとは異なったふう知覚するというので、おそらくは誤りであるかあるいは虚であるとも思われた。というのは、そうした理解は質料を単独で、ないしは形相を他から切り離して取り上げこれに注目するが、しかしそれらはいずれも切り離されて自存してはいないので、確かに物をそれが存在するのとは異なるふう知覚し、それゆえ空虚であると思われるからである。[略] しかし抽象においてははけってこのようなことは起こらないのである。[略] そしてそれが存在するのとなんらか別の仕方でも理解されると言われるが、しかしそれは、[略] 存在するのとは別の自体においてということではなく、理解の様態は存立する様態とは別であるという点で別なのである。」(「ペトルス・アベラルドゥス ポルピュリウス註釈(イングレディエンティブス)」清水哲郎訳、『中世思想原典集成7 前期スコラ学』, 平凡社, 1996年, pp. 480-1) .

それ故にまた、数学的なものは、可感的なものなしに知性認識されるのだから、可感的なものから抽象されているとプラトン主義者は確信した⁵³。それ故にプラトン主義者は、人間はこれらの人間たちから抽象されているとし、そうしたことは有や一や善にまで及んだ。その有や一や善をプラトン主義者は事物の最高の力であると措定した⁵⁴。実際に、

⁵³ Cf. アリストテレス『形而上学』第1巻(前註を見よ)；トマス・アクィナス『「形而上学」註解』第1巻第10講(Ed. Cathala & Spiazzi, p. 46)、「アリストテレスは、数学的実体に関するプラトンの見解を提示し、プラトンは形象や可感的なものとは別の実体、すなわち数学的なものを措定したと述べている。そしてプラトンは、こうした類の有 [=数学的なもの] は三つの実体内で中間のもの、すなわち可感的なものよりは上にあり形象よりは下にあるものであると述べて、[形象と可感的なもの] 両者から区別したのであった。まず可感的なものとは区別したのは、可感的なものは可滅的で可動的であるのに対して、数学的なものは永続的で不可動的だからである。そしてこのことをプラトンは数学の理拠それ自体から解したのであった。というのも、数学は運動から抽象するからである。それに対して数学的なものが形象と異なるのは、数学的なものにおいて、数に即しては異なるものが見出されるが、種に即しては類似したものが見出されるからである。さもなければ、数学の論証は成り立たないであろう。」；アリストテレス『自然学』第2巻(193b35-194a1)、「あのアイデアを説く人々も、この同じ切り離し[抽象化]を、そうとは意識しないで、行なっている。というのは、かれらは数学の対象よりもよりいっそう切り離されにくいところの自然的な事物をも切り離しているからである。」(出・岩崎訳, p. 50)；トマス・アクィナス『「自然学」註解』第2巻第3講(Ed. Leon., t. 2, p. 62)、「次に、「こうしたことを意識せずに行っている人々は」云々と述べる際に、アリストテレスはプラトンの誤謬を前述のことから排除している。すなわちプラトンには、いかにして知性は、真なる仕方存在に即しては抽象されていないものを抽象することができるのかということが知られていなかったので、知性に即して抽象されているものはすべて、事物に即して抽象されているとプラトンは措定したのである。それ故にプラトンは、数学者が可感的質料から抽象するということから、数学的なものは抽象されていると措定したのみならず、自然学が普遍に関わるものであって個別的なものに関わるものではないということから、自然的な事物それ自体もまた抽象されていると措定したのである。それ故にプラトンは、人間や馬や石やその他このような類のものは分離されていると措定し、自然的なものの方が数学的なものよりも抽象されていないにも関わらず、その分離されているものをたしかにアイデアと呼んだのであった。」

⁵⁴ Cf. アリストテレス『ニコマコス倫理学 (*Ethica Nicomachea*)』第1巻(1096a17-23)、「アイデアを考えついた人々は、より先なるものとより後なるものが語られるような事柄に関してアイデアを設定しなかった(彼らが数のアイデアを整えることをしなかったのは、このためである)。だが、善は「何であるか」においても、[略]「関係的なもの」においても語られ、しかも「それ自体として」語られる本質存在としての善は、「関係的なもの」について語られる善より本性上先立っている(というのも、後者は言わばひこばえが木に寄生するように、それ自体としてあるものに付帯するものだからである)。それゆえ、こうしたさまざまなものの上に立つ何か共通のアイデアなるものはありえないこととなる。」(神崎繁訳、『アリストテレス全集15』, 岩波書店, 2014年, pp. 29-30)；トマス・アクィナス『「ニコマコス倫理学」註解』第1巻第6章(Ed. Leon., t. 47.1, pp. 22-23, ll. 76-124)；マクロビウス『「スキピオの夢」註解 (*In Somnium Scipionis*)』第1巻第1章第14-15節(Ed. Willis, p. 6, l. 22-p. 7, l. 7)；第6章第7-8節(p. 19, ll. 24-30)；アウグスティヌス『神国論 (*De Civitate Dei*)』第8巻第8章(PL 41, 233)、「プラトンは、真にして最高の善そのものが神であると言う」(茂泉昭男・野町啓訳、『アウグスティヌス著作集 第12巻』, 教文館, 1982年, p. 182)；ディオニュシオス『神名論 (*De divinis Nominibus*)』第4章第1節(PG 3, 694 B)、「それでは話がそこまで進んだので、善という神名の考察に入ろう。聖なる善を記した人々は、特にこの名を神を越えた神に与えた。私が思うのに、彼らは神性原理の本質を善と呼ぶことによって、他のすべての名称から区別したのである。その理由は、神性原理は本質的に善いものであり、その存在そのものによって、万物の上にその善性を拵げてゆくからである。」(熊田陽一郎訳、『キリスト教神秘主義著作集 第1巻』, 教文館, 1992年, p. 168)；第5章第1節(816)、「それでは神の書に語られた存在の名称に移ろう。それは真実に存在するものの真実なる存在を示す名称なのである。ただここで想起しておきたいことは、この考察の目的は存在を越えた存在者を、存在を越えている限りにおいて解明することではない。そのようなものは語ることも知ることもできないものであり、どのような意味でも解明されないも

常に下位のものより自らより上位のものよりも個別的であり、上位のもの本性は下位のものに分有されているとプラトン主義者は見てとった。ところで、分有するものは、質料的なものとして分有されるものと関係している。それ故に、抽象されたもの間では、或るものが普遍的であればあるほど、それだけそれは形相的なものであるとプラトン主義者は措定した⁵⁵。それに対して、[プラトン主義者と] 同じ道筋で出発しながら、[結論は] その反対に、或る形相が普遍的であればあるほど、それだけそれは質料的なものであると措定する人々がいた。そしてこれは『生命の泉』におけるアヴィケブロン立場である。アヴィケブロンは、あらゆる形相を欠いた第一質料を措定した上で、それを普遍的質料 (*materia uniuersalis*) と呼び、その普遍的質料は霊的実体と物的実体に共通だとして、その普遍的質料に対して普遍的形相——すなわち実体形相——が到来すると主張した⁵⁶。ところで彼の主張によれば、そのようにして実体形相の下にある質料は、

の、合一さえも越えるものである。むしろ我々の目的は、神性の原理である存在原理が、すべてのものに向かってその存在をつくりあげてゆくその発出を讃えることにある。／というのは善という神名は、万物の原因であるものの発出全体を示すのである。そこで善は在るものと在らざるものとをその範囲としてもち、しかもすべての在るものと在らざるものを超越している。そして存在という神名はすべての在るものをその範囲とし、しかも在るものを越えている。生命という神名はすべて生あるものを範囲とし、しかも生あるものを越えている。知恵という神名はすべての知性的なもの、理性的なもの、感覚をもつものをその範囲とし、しかもこれらのすべてを越えている。」(pp. 207-8); トマス・アクィナス『原因論』註解 (*Super Librum De Causis Expositio*) 第3講 (Ed. Saffrey, p. 18, ll. 14-21), 「ところでプラトンは、これら諸形相の間に次のような秩序を、即ち、形相はそれがより普遍的であればあるだけ、それだけ、より単純にしてより前なる原因である、という秩序を措定した。というのは、それはより後なる諸形相によって分有されるのだからである。つまり、動物は人間によって分有されるのであり、また生は動物によって分有されるのであり、同じ仕方でもた次がというわけである。ところで、その究極のものとして、すべてのものによって分有されるがそれ自らは他の何ものをも分有しないごときものがあり、それが一自体又は離在的善なのであり、それを『最高の神』とか『万物の第一原因』と呼んだのであった。」(『聖トマス・デ・アクィノ 原因論註解』ヴエンサン=マリー=プリオット・大鹿一正訳、『原因論』聖トマス・デ・アクィノ 原因論註解』、聖トマス学院、1967年、p. 18); プロクロス『神学綱要 (*Elementatio Theologica*) 第12命題 (Ed. Boese, p. 9, ll. 1-19), 「<善>は、すべての存在の源であり、第一最高の原因である。[略] もしすべてのものが、ただ一つの原因から発出するとすれば、その原因は、<善>であるか、<善>よりすぐれているかのいずれかであると、考えなければならない。[略] そこで、もし<善>が万有の依存する窮極のものであるとすると、<善>は万有の源であり、その第一の原因であるということになるだろう。」(『神学綱要 プロクロス』田之頭安彦訳、『中公バックス 世界の名著 15』、中央公論社、1980年、pp. 456-7); 第13命題 (p. 10, ll. 1-2), 「善いものはすべて、それを分有するものを一なるものとする。そして、一なるものとすることは、すべて善いことであり、<善>と<一者>は同じである。」(p. 457)。

⁵⁵ Cf. プロクロス『神学綱要』第24命題 (Ed. Boese, p. 16, ll. 18-19), 「<分有するもの>はすべて、<分有されるもの>よりも劣っており、<分有されるもの>は、<分有されないもの>よりも劣っている。」(田之頭訳, p. 467)。前註も見よ。

⁵⁶ 「到来する (*advenire*)」という言葉遣いは、トマスがアヴィケブロンの説を述べる時や批判する時に特徴的なものである。Cf. 『第十一任意討論 (*Quodlibet XI*)』第5問題 (Ed. Leon., 25.1, pp. 158-9, ll. 32-60); 『対異教徒大全』第4巻第81章 (Ed. Leon., t. 15, p. 253a, ll. 6-7); 『定期討論集 魂について』第9問題主文 (註62を見よ); 『『靈魂論』註解』第2巻第1章 (Ed. Leon., t. 45.1, p. 71, l. 249)。なお、ヨハネス・ヒスパヌスおよびドミニクス・グンディサリヌスによる『生命の泉 (*Fons Vitae*)』のラテン語訳では以下の箇所で見られる: 第1論考第12節 (Ed. Baeumker, p. 15, l. 17); 第2論考第4節 (p. 32, l. 5); 第14節 (p. 48, l. 11); 第3論考第25節 (p. 138, ll. 14-15); 第38節 (p. 167, l. 21); 第4論考第3節 (p. 216, l. 15); 第7節 (p. 228, ll. 1-3) など。

その或る部分で物体性の形相を受容するが、その際に霊的実体に属するその質料の別の部分はこのような「物体性の」形相なしのままである。このようにして続けてアヴィケブロンは、質料において形相を、最も種別化された最終的な種にまで至る類と種の秩序に則って、「別の」形相の下に措定した⁵⁷。そしてこのような見解は、たしかに第一の見解 [=プラトン主義の見解] とは一致してないと思われるかもしれないが、他方で事物の真理という観点ではその「プラトン主義者による」見解と一致しており、その見解に続くものである。実際、プラトン主義者が措定したところによれば、或る原因が普遍的で形相的であればあるほど、或る個体におけるその原因の完全性はそれだけ減じられる。それ故に、第一の抽象されたもの——それは善に属する——の結果をプラトン主義者は第一質料と措定した。それは、最上の能動者には第一の基体が対応するようにするためである。このようにして続けて、質料における抽象された原因および分有された形相の秩序に則って、抽象されたものがより普遍的でより形相的であるのと同様に、分有された形相はより普遍的でより質料的であるとプラトン主義者は措定した⁵⁸。

しかしながら以上のような見解は、アリストテレスが考えた哲学の真なる原理によれば不可能である。まず第一に次のような理由がある。実体に属するいかなる個体も端的に一ではなくてになってしまう。その理由は以下の通りである。端的に一であるものは、二つの現実態から生じるのではなく、むしろ可能態であるものが現実態になる限りで、可能態と現実態から生じる。そしてそれ故に、白い人間は端的に一ではなく、むしろ二本足の動物が端的に一である。なぜなら、動物であるところのものそのものが二本足だからである。ところで、もし動物「であること」と二本足「であること」が別々のことであるならば、人間は一ではなくむしろ多になってしまうこと、哲学者アリストテレスが『形而上学』第三卷⁵⁹および第八卷⁶⁰で議論している通りである。故に、明白なことには、

⁵⁷ Cf. アヴィケブロン『生命の泉』第2論考第2節 (Ed. Baeumker, p. 27, l. 1 sqq.); 第4論考第3節 (p. 216, ll. 1-6), 「自然の形相は自育的魂の形相とは別であること、自育的魂の形相は感覺的魂の形相とは別であること、感覺的魂の形相は理性的魂の形相とは別であること、理性的魂の形相は知性体の形相とは別であること、といったことが、あたかもあなたにとっては確かなことではなかったかのようであった」; 第5節 (p. 220, l. 10 sqq.); 第5論考第34節 (p. 320, ll. 8-12), 「実際この質料は、第一の質の形相を受容するために動かされ、その後で動物の形相を受容するために、その次に自育的形相を、その次に感覺的形相を、その次に理性的形相を、その次に知性的形相を「受容するために動かされ」、それは普遍的な知性体の形相に結合されるまで「動かされる」」。

⁵⁸ Cf. プロクロス『神学綱要』第71命題 (Ed. Boese, p. 38, ll. 1-9), 「およそ根源的な諸原因のなかで普遍かつ高度の地位をしめるものは、それから結果したもののなかでは、自らの輝き (つまり力) のゆえに、個別的な諸原因があたえるものにたいして、いわば基体のような役割を演じる。すなわち、これら上位の諸原因からでた輝きは、第二義的なものからの発出の基礎となるのであって、後者は前者を基盤として、その上に成りたっているのである。そして、このようにして、<分有>にもそれぞれの順位の別ができるのであって、普遍的な諸原因がまず活動を始め、個別的な諸原因が自らの持ちものを<分有するもの>にあたえるという形で前者の活動を補いながら、両者の現われが相俟って、上方から同一の基体に到るのである。」(田之頭訳, p. 498)。なお註54も見よ。

⁵⁹ より正しくは第七卷。Cf. アリストテレス『形而上学』第7卷 (1037b 12-21), 「さて、その難問というのはこれである。すなわち、その説明方式がすなわち定義であると我々の言うところのそれが一つであるのは、そもそもなにによってであるか? たとえば「人間」については、「二本足の動物」がすなわちその定義であると言われるが (というのは、かりにこれを「人間」の説明方式であるとしてのことだが)、この場合、なにゆえにこれが一つであって多——すなわち「動物」と「二本足」と——で

もし実体に属する或る一つの個体において実体形相が多数のものとして多数化されるならば、実体に属する個体は端的に一ではなく、むしろ白い人間のように或る点では一であることになってしまう。以上に対して、第二には次のような理由がある。附帯的なものの理拠はそれが基体においてあるということの内に存するが⁶¹、他方で基体ということで知性認識されるのは、たんに可能態にあるのではなく現実態にある或る有のことであり、そのあり方に即すと実体形相は基体においてではなくむしろ質料においてある。故に、現実態にある或る有がどんな仕方でもどんな形相の基体とされるにしろ、その形相は附帯的なものである。ところで、明白なことには、何であれ存在する実体形相はすべて、有を現実態にあらしめ現実態にあるものとして成立させる⁶²。それ故に帰結するの

はないのか？ というのは〔なぜこれが問題になるかというに〕、たとえば「人間」と「色白さ」との場合、これらのうちの一方が他方に属していないときには、両方は〔一つではなくて〕多であるが、しかし一方が他方に属していて、その基体の方すなわち「人間」がなんらか〔他方すなわち「色白さ」によって〕限定されているときには、両方は一つである、すなわちここに一つのもので生成し、一つの「色白い人間」が存在しているわけである。しかるに、「動物」と「二本足」との場合には、その一方が他方に与かるという関係には置かれていない。なぜなら、〔動物は類であり二本足はその種差の一つであるが〕一般に類はその種差に与かるとは考えられないからである、というのは、〔もし与かるとすれば〕同じものが同時に反対のものどもに与かるといことになるからである。けだし類が種に区分されるところの種差は互いに反対のものどもであるから。〔それゆえに「動物」と「二本足」とは与かるとい関係では一つにならないではないかと論難されよう〕。しかしそれのみではなく、たとえ〔類がその種差に〕与かるとしても、やはり同様に論難されよう、というのは、種差は依然として数多く存するからである、たとえば、人間は「有足」で「二本足」で「無翼」な動物だから。そうだとすれば、なにのゆえにこれら〔多くの種差〕が多ではなくて一つであるのか〔と論難されよう〕。もちろん、これらがなにか〔或る一つのもの、たとえば一つの人間〕に属するがゆえにとは答えられない、なぜなら、この論法でゆけば、もののすべての属性から一つのもので生じうるといことになるから。しかしながら、たしかに或るものの定義のうちに含まれる諸要素は一つであらねばならない、なぜなら、定義は一種の説明方式であり、一つの実体の説明方式であるからして、この定義は或る一つのもの〔全一体〕であらねばならない。そしてそのゆえは、我々の主張する通り、実体は或る一つのもの〔全一体〕であり、或るこれなるもの〔個体〕を意味するからである。」(出訳(上), pp. 272-3); トマス・アクィナス『形而上学』註解 第7巻第12講 (Ed. Cathala & Spiazzi, p. 372); 『第一任意討論 (Quodlibet I)』第4問題第1項主文 (Ed. Leon., t. 25.2, p. 183, ll. 53-56), 「哲学者アリストテレスが述べているように、もし動物であることと二足であることが別のものに由来するならば、「白い人間」が端的に一ではないのと同様に、「二足の動物」もまた端的に一ではなくてしまう」。

⁶⁰ Cf. アリストテレス『形而上学』第7巻(註59を見よ); 第8巻(1045 a 14-20), 「そうだとすると、「人間」を一つのものであるのは一体なにであるか? なにゆえに「人間」は一つであって多ではないのか? たとえば、それが「動物」と「二本足」との二つでないのはなにゆえか、ことに或る人々の言うように「動物それ自体」や「二本足それ自体」が存在するとすれば「人間」はこれらでありそうなものなのに、なにゆえに「人間」はこれら「自体ども」ではないのか? またこのようにして、人間どもは、それぞれ、「人間それ自体」あるいは「一それ自体」に与かるとによってではなく、あの二つに、すなわち「動物それ自体」と「二本足それ自体」とに与かるとによって存在するということになり、そして一般に「人間」は一つのものではなくて一つより多くのもの、すなわち「動物」と「二本足」とであるということになるであろうのに、なにゆえにそうではないのか?」(出訳(上), pp. 310-1); トマス・アクィナス『形而上学』註解 第8巻第5講 (Ed. Cathala & Spiazzi, p. 420)。

⁶¹ 「附帯的なものの理拠はそれが基体の内にあるということの内存する (in hoc consistit ratio accidentis quod sit in subiecto)」という言明は、「附帯的なものの存在は内在である」と同じ意味である。

⁶² Cf. トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第9問題主文 (Ed. Leon., t. 24.1, pp. 79-80, ll. 145-68), 「ところで、実体形相に固有なのは、端的に質料に存在を与えることである。というのも実体形相とは、それを通じて事物がそれであるところのものだからである。〔略〕したがって、もし或る形相が質料に

は、質料に到来する第一の形相のみが実体形相であるのに対して、それに続けて到来する形相はすべて附帯形相だということである⁶³。また以上のことは、次のように主張する人々がいても排除されない。すなわち、第一の形相は第二の形相に対しては可能態においてあるが、それは、基体はすべて、可能態が現実態に対するようにして自らに附帯するものに対して関係づけられているからである、という主張のことである。また、生を受容可能性 (susceptibilitas) を担う物体の形相の方が、それを担っていない形相よりも完全なものとなってしまうだろう。それ故に、もし魂のない物体の形相が物体を基体とするならば、なおさら可能態において生を有する物体の形相の方が物体を基体たらしめる。かくして魂は基体の内における形相となってしまうが、それは附帯的なものの理拠である⁶⁴。第三には次のような理由がある。最終的な形相の獲得において生成 (generatio) が存在するのは、端的にはなくむしろただ或る点においてのみであるということが帰結される。というのも、生成とは非存在から存在への変化であるのだから、端的に生成されるものは端的な非有から端的に言う限り有として生じるからである。ところで、現実態にある有として先在するものは、端的な有として生じることはできず、むしろ白いものや大きいもののようにしかじかの有として生じること——すなわち或る点で生じること——ができるのみである。したがって、質料において先行する形相が現実態にある存在を生じさせるのだから、それに続く形相は端的な存在ではなくしかじかの存在——例えば人間であること、ないし驢馬であること、ないし植物であること——を生じさせるのである。そしてその場合、端的に生成するということはないはずである。そしてそれ故に、現実態にある或るもの——例えば火や空気や水や [その] 或る中間物——が第一質料だと措定した古代の人々は皆、生じるということは変化することにはかならないと主張した⁶⁵。そしてアリストテレスは、彼ら古代の人々の [考えた]

に対して端的に存在を与えるようなものではなく、むしろ既に別の形相を通じて現実態において存在している質料に対して到来するのならば、それは実体形相ではないであろう。以上から明らかなように、実体形相と質料の間には、ある人々が主張するようないかなる中間的な実体形相も入りえない。彼らは、それらの内の一方が他方の下に秩序づけられるような類の秩序に即して、質料においては相異なる形相の秩序が存在すると主張している。例えば次のように言うことができよう。質料は、或る一つの形相に即して、現実態における実体が存在することを有しており、別の形相に即しては物体が存在することを有しており、また別の形相に即しては魂を有する身体が存在することを有しており、そのようにして続いていく。[略] 実体形相とはこの或るもの (hoc aliquid) をなすところのものである。」

⁶³ 前註を見よ。

⁶⁴ 具体的に誰の見解かは不明。

⁶⁵ Cf. アリストテレス『自然学』第1巻 (187a26-31)、「ところで、アナクサゴラスがそれら [=万物の始原のこと——引用者注] をこのように無限であると考えようになったのは、「あらぬものからはなにものも生じない」という自然学者たちに共通の見解を真であると想定していたがゆえにであるように思われる (実に、このゆえに、かれらはあのように「すべては一緒であった」と言い、これこれのものが生成するというのは [実は] 変化することであると、そして或る人々はこれを結合し分離することであるとも言ったのである)。」(出・岩崎訳, p. 18) ; トマス・アクィナス『「自然学」註解』第1巻第9講 (Ed. Leon., t. 2, pp. 27-28) ; 『神学大全』第1部第76問題第4項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 224) , 「往昔の自然哲学者たちは、第一質料はすでに或る現実的な有、例えば火・空気・等々であるとする立場から、端的な仕方においては何ものも生ぜず何ものも滅びないと説いたのであり、また、『自然学』第一巻にいうごとく、『すべての生成は変化にはかならないといつてのけた』のであった (高田・大鹿訳 (第6冊) , p. 61) .

疑わしいことを、質料はたんに可能態においてのみ存在すると措定することで解消し⁶⁶、質料は端的には生成と消滅の基体だと主張している⁶⁷。そして、質料は決していかなる形相からも抜け出ることがないのだから⁶⁸、それ故に質料は、或る一つの形相を受容する時にはいつでも別の形相を失うのであり、逆もまたそうである。そしてそれ故に、一方のものの生成は常に他方のものの消滅を伴うのであり、逆もまたそうである⁶⁹。

故に、かくしてわれわれが述べているところによれば、しかじかの人間の内には理性的魂以外のいかなる他の実体形相も存在せず、また、理性的魂を通じて人間はたんに人間であるのみならず動物であり生物であり物体であり実体である有でもある。実際、以上のことは次のようにして考察できる。形相とはそもそも質料における能動者の類似で

⁶⁶ Cf. アリストテレス『形而上学』第8巻 (1042 a 27-28), 「ここに「質料」というのは、私の言う意味では、現実的にはこれ〔と指し示されうる個体〕ではないが、可能的にはこれであるところのもののことである」(出訳(上), p. 296); トマス・アクィナス『「形而上学」註解』第8巻第1講 (Ed. Cathala & Spiazzi, p. 403), 「質料が実体であると言われるのは、それ自体において現実態において存在する或る有として考えられるようなものではなく、むしろ可能態においてあるものとしてであり、そのようにして現実態において或るものだということなのである。」

⁶⁷ Cf. アリストテレス『生成消滅論』第1巻 (314 b 1-4), 「かくして、一つのものからあらゆるものを作り上げる人たちは、必然的に、生成と消滅は性質変化であると言わなければならない。というのも、基底にあるものがつねに同じ一つのものとしてとどまっていなければならない、そしてそのようなものはわれわれが「性質変化する」と言うところのものだからである。」(「生成と消滅について」金山弥平訳、『アリストテレス全集5』, 岩波書店, 2013年, p. 216); トマス・アクィナス『「生成消滅論」註解』第1巻第1章 (Ed. Leon., t. 3, p. 268), 「ところで、我々が措定しているところによれば、あらゆる生成消滅可能なものの第一の基体は一であるが、それは現実態にある有ではなく、むしろ可能態においてあるようなものである。」

⁶⁸ Cf. トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第33章 (Ed. Leon., t. 13, p. 346a, l. 13), 「質料があらゆる形相を欠いていることはありえない」; 『神学大全』第3部第75問題第3項主文 (Ed. Leon., t. 13, p. 165), 「何らの形相なしに存在しているような、そうした第一質料へと還元することは不可能である。なぜなら、質料は形相なしには存在できないからである。」(稲垣訳(第43冊), p. 62)。

⁶⁹ Cf. アリストテレス『形而上学』第2巻 (994 b 5-6), 「その一つの項の消滅が他の項の生成なのである」(出訳(上), p. 75); 『生成消滅論』第1巻 (318 a 23-25), 「はたして、「これ」の消滅は別のものの生成であり、「これ」の生成は別のものの消滅であるから、必然的に変化は止むことがないのであろうか。」(金山訳, p. 237)。「一方のものの生成は他方のものの消滅を伴う (generatio unius est cum corruptione alterius)」という言明は、「一方のものの生成は他方のものの消滅である (generatio unius est corruptio alterius)」ないし「一方のものの消滅は他方のものの生成である (corruptio unius est generatio alterius)」とも言われる。Cf. アルベルトゥス・マグヌス『被造物大全 (Summa de Creaturis)』第1篇第1論考第2問題第4項 (Ed. Borgnet, t. 34, p. 331a); トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第1区分第1問題第5項第10異論 (Ed. Mandonnet, t. 2, p. 30); 第34区分第1問題第2項第5異論 (p. 874); 第4巻第17区分第1問題第3項第5小問題反対異論 (Ed. Moos, t. 4, p. 839); 第2問題第1項第3小問題第3異論解答 (p. 862); 『定期討論集 真理について』第5問題第4項主文 (Ed. Leon., t. 22.1, p. 150, ll. 160-2); 『第七任意討論 (Quodlibet VII)』第4問題第2項主文 (Ed. Leon., t. 25.1, p. 21, l. 78); 『第一任意討論』第4問題第1項 (t. 25.2, p. 184, ll. 87-88); 『対異教徒大全』第1巻第89章 (Ed. Leon., t. 13, p. 241b, l. 3); 第3巻第1章 (t. 14, p. 3b, ll. 23-24); 第5章 (p. 14a, ll. 8-9); 第6章 (p. 15b, ll. 23-24); 第10章 (p. 26a, ll. 18-19); 第13章 (p. 36b, ll. 5-6); 第71章 (p. 210b, ll. 4-5); 第104章 (p. 326a, l. 3); 『神学大全』第1部第19問題第9項主文 (Ed. Leon., t. 4, p. 247); 第22問題第2項第2異論解答 (p. 265); 第72問題第1項第5異論解答 (t. 5, p. 185); 第118問題第2項第2異論解答 (註87を見よ); 第2-1部第113問題第6項第2異論解答 (t. 7, p. 336); 第3部第77問題第5項主文 (t. 12, p. 199); 『定期討論集 靈的被造物について』第3項第12異論解答 (本稿第12異論解答を見よ); 『定期討論集 悪について』第1問題第1項第16異論 (Ed. Leon., t. 23, p. 4, l. 12); 第4問題第7項第1異論解答 (p. 124, l. 78)。

ある。ところで、能動的で働きをもたらず力において見出されることには、或る力がより優れていなければならないほど、それだけ自らの内で多数のものを複雑にではなく単一に把握する。例えば、共通感覚 (*sensus communis*) は或る一つの力に即してあらゆる可感的なものに及ぶが、そのすべての可感的なものを諸々の固有感覚 (*sensus proprius*) は異なる能力に即して捉える。ところで、より完全な能動者には、より完全な形相を導入することが属する。それ故に、より完全な形相は、それより下位の形相が相異なるものを通じてなすところのものすべてを、或る一つのものを通じてなし、しかもより広くなす。例えば、もし魂のない物体の形相が質料に対して [たんなる] 存在と物体であることを与えるならば、植物の形相は質料に対して以上のもの [=存在と物体であること] のほかに生きることを与えるのに対して、感覚的魂は以上のもの [=存在と物体であることと生きること] のほかに感覚できることを与える一方、理性的魂は以上のもの [=存在と物体であることと生きることと感覚できること] のほかに理性的であることを与えるであろう。というのも、自然の事物のあらゆる類と種を観察すれば明らかのように、自然の事物の形相は完全であることとより完全であることに即して異なっていることが見出されるからである。それ故に、事物の種が数と比較されること、『形而上学』第八巻で述べられている通りである。すなわち、数の種は一であることを加えたり減じたりすることで変わる。それ故にまた、アリストテレスが『靈魂論』第二巻で述べているように、「感覚を司るものの中には栄養摂取を司るものがあり」、知性認識を司るものの中には感覚を司るものがあるが、「それは四角形の内には三角形があり」、五角形の内には四角形があるのと同様である。というのも、五角形は潜勢態において (*uirtute*) 四角形を含んでいるからである。実際、五角形は、次のことをさらにより広く有している。すなわち、四角形に固有なことと五角形に固有なことが、それらは二つの図形でありながらも、五角形にとっては別々のことではないということである。そのようなわけで、知性的魂 (*anima intellectiva*) もまた潜勢態において感覚的魂を含んでいる。なぜなら、知性的魂は、このこと [=感覚的魂であること] をさらにより広く有しているからであるが、だからといって魂が二つあるのではない⁷⁰。ところで、もし知性的魂が人間においては本質を通じて感覚的魂と異なるということが言われた場合、知性的魂の身体に対する合一の理拠をあてがうことはできない。というのも、知性的魂に固有な働きは何であれ身体

⁷⁰ Cf. アリストテレス『靈魂論』第2巻 (414b28-32), 「また、魂をめぐる次の事情は形の場合と対応関係にある。すなわち、形の場合でも魂をもつものの場合でも、たとえば四角形のうちには三角形が、感覚する能力のうちには栄養摂取する能力が、という具合に、より先なるものがそれに後続するものうちにつねに可能状態としてそなわっている。」(中畑訳, pp. 77-78); トマス・アクィナス『「靈魂論」註解』第2巻第5章 (Ed. Leon., t. 45.1, p. 90, ll. 270-81); 『定期討論集 魂について』第2問題第8異論 (Ed. Leon., t. 24.1, p. 14, ll. 57-60), 「哲学者アリストテレスが『靈魂論』第二巻で述べているように、三角形が四角形においてあり、四角形が五角形においてあるのと同様に、自育を司るものは感覚を司るものにおいてあり、感覚を司るものは知性を司るものにおいてある」; 第2異論解答 (p. 20, ll. 411-8), 「哲学者アリストテレスの言う図形と魂の諸部分についての類似性は次の点に認められる。四角形は三角形が有するものすべてをしかもより広く有していて、また五角形も四角形が有するものすべてを [しかもより広く] 有しているのと同様に、感覚的魂は自育的魂が有しているものをしかもより広く有している。」; 『知性の単一性について——アヴェロエス主義者駁論 (*De Vnitate Intellectus contra Averroistas*)』第1章 (Ed. Leon., t. 43, pp. 300-1, ll. 811-44); 『第一任意討論』第4問題第1項主文 (Ed. Leon., t. 25.2, pp. 183-4, ll. 57-94); 『神学大全』第1部第76問題第3項主文 (Ed. Leon., t. 5, pp. 220-1) .

的な器官を通じたものだからである。

【異論解答】

故に、

一。第一に対しては次のように言わなければならない。ディオニュシオスの権威⁷¹は能動因（*causa agens*）について了解されるべきであって、形相因（*causa formalis*）について了解されるべきではない。

二。第二に対しては次のように言わなければならない。最も完全な形相は、それより不完全な形相が与えてくれるものをすべて、しかも広く与えてくれるのだから、それより不完全な形相によって完成されるような完全性のあり方へと最も完全な形相によって完成される限りでの質料は、より完全な形相が他の形相に対して付加するような完全性のあり方から見ると固有の質料だと見なされる。ところが、諸々の形相においてこうした区別が了解されるのは、本質に即してではなくむしろ可知的な理拠に即してである。故にかくして、生の受容を担う身体的存在（*esse corporeum*）において完成されたものとして知性認識される限りでの質料は、魂の固有の基体である。

三。第三に対しては次のように言わなければならない。動物は真に人間であるところのものであるのだから、動物的本性（*natura animalis*）と人間の区別は、形相の間の実在的な相異に即したもの——それを通じて動物であるような別の形相が存在し、それを通じて人間であるような別の形相がそれに付加されるといったように——ではなく、むしろ可知的な理拠に即したものである。実際、身体が魂によって感覺的存在（*esse sensibile*）〔＝感覺能力を有するもの〕へと完成されたものとして了解される場合には、質料的なものが形相的なものに対するようにして、身体は最終的な完成——すなわち理性的魂である限りでの理性的魂による完成——に関係づけられている。すなわち、類と種は何らかの可知的理拠を表示するのだから、種と類の区別に対して必要とされるのは形相の間の実在的な区別ではなくむしろ可知的な区別のみである。

四。第四に対しては次のように言わなければならない。魂は認識（*cognitio*）と欲求（*appetitus*）を通じて身体を動かす。ところで、動物における感覺能力および欲求能力は特定の器官を有しており、かくしてその器官——すなわちアリストテレスによれば心臓⁷²——から動物の運動が始まる。したがって、かくして動物の一方の部分は動かすものであり、他方の部分は動かされるものである。そのため、動かす部分は欲求する魂の第一の器官として解され、残りの身体は動かされるものだけということになる⁷³。しかるに、人間においては意志と知性——すなわち何らの器官の現実態でもないもの——が動

⁷¹ 註3を見よ。

⁷² Cf. アリストテレス『動物部分論』第3巻（665 a 11-12）、「心臓が体の前方中央に置かれており、前方に置かれた心臓に、生命の始原、すなわち、動物のあらゆる運動と感覺の始原があると私たちは主張している」（坂下訳, p. 209）；『動物発生論』第2巻（743 b 25-26）、「さて、諸感覺の原理が心臓にあるために、心臓は動物の全身の中ではまず第一にできる」（島崎訳, p. 185）；『動物運動論』（703 a 14-16）、「そして、その始原は、或る動物にとっては心臓にあり、別の動物にとっては心臓の類比物においてあるので、それゆえに、生来の氣息も明らかにそこにある」（坂下訳, p. 418）；トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第72章（註44を見よ）。また註44および45を見よ。

⁷³ 本項第4異論を見よ。

かすのだから、知性的部分に即しては魂それ自体が動かすものである一方、その魂によって身体的存在において完成されたものであることに即しては身体が動かされるものであることになるだろう⁷⁴。

五。第五に対しては次のように言わなければならない。御言葉の受肉において魂は御言葉と肉の間にある媒介として措定されているが、それは必然性 (*necessitas*) ではなく適合性 (*congruentia*) の故である。それ故に、たとえキリストの死に際して魂が肉から分離されても、御言葉は肉と無媒介に合一されたままであった。

六。第六に対しては次のように言わなければならない。かの書物 [= 『霊と魂について』] はアウグスティヌスのものではなく、またほとんど権威もない。そしてその叙述においては全く不適切な仕方でも語られている⁷⁵。実際、表象能力を司るものと感覚能力を司るものの両者は魂に属している。他方で、感覚能力を司るものは、身体に属する事柄の欲求である限りで肉と関わっていると言われる一方、表象能力を司るものは、自らの内に物体の類似物が物体なしに存在している限りで魂と関わっていると言われる。ところで、この表象能力を司るものと感覚能力を司るものは魂と肉の間の媒介であると言われるが、それは魂が、身体の形相である限りではなく、むしろ動原である限りでのことである。

七。第七に対しては次のように言わなければならない。身体の統御 (*amministratio*) が魂に属するのは魂が動原である限りでのことであり、魂が形相である限りでのことではない。そして、たとえそれによって魂が身体を統御するところのものが、その質料に固有な態勢として、魂が身体の内にあることにとって必要であるとしても、だからといって統御の理拠と形相として合一することの理拠が同じであることにはならない。というのも、動原である魂と形相である魂が実体に即しては同じだが理拠という点では異なるのと同様に、形相として合一することに必要なことと統御に必要なこともまた、同じことではあるが同じ理拠に即してはいないからである。

八。第八に対しては次のように言わなければならない。魂が身体と異なるのは可滅的なものが不可滅的なものと異なるようにしてである、ということによっては、魂が身体の形相であるということが除外されるわけではないこと、上述の所から明らかな通りである⁷⁶。それ故に、魂は身体と無媒介に合一することになる。

九。第九に対しては次のように言わなければならない。魂が動原である限りにおいて、魂は精気を通じて身体と合一することが [異論では] 述べられている。何故なら、身体の中で魂によって動かされる第一のものは精気だからであり、アリストテレスが『動物の運動の原因について』で述べている通りである⁷⁷。ちなみにこの書物 [= 『動物の運動の原因について』] もまたほとんど権威のないものである⁷⁸。

⁷⁴ Cf. 『定期討論集 魂について』第9問題第6異論解答 (Ed. Leon., t. 24.1, pp. 83-84, ll. 365-432) .

⁷⁵ 本項第6異論を見よ。

⁷⁶ 本書第2項第16異論解答 (石田訳, pp. 151-2) を見よ。

⁷⁷ Cf. アリストテレス『動物運動論』(註45を見よ) ; トマス・アクィナス『神学大全』第1部第76問題第7項第1異論解答 (註45を見よ) .

⁷⁸ 『動物の運動の原因について (*De Causa Motus Animalium*)』ないし『動物運動論 (*De Motu Animalium*)』は当時の西洋中世に伝わっていたアリストテレスの『動物論 (*De Animalibus*)』19巻本の中に含まれて

十。第十に対しては次のように言わなければならない。もし或る二つのものが本質という点で異なっている場合、その両者は自らの種の完結した本性を有していることになり、それらは「両者を」結合し合一するような或る媒介を通じてのみ合一できる。ところで、魂と身体はこのような類のもの [=本質という点で異なるもの] ではない。というのも、魂と身体の両者は本性的には人間の部分だからである。むしろ身体と魂は、質料が形相に対するようにして関係づけられており、それらの合一が無媒介のものであること、既述の通りである⁷⁹。

十一。第十一に対しては次のように言わなければならない。魂が完成されるために身体と合一するのは、表象にかかわる知性認識に関するのみならず、種の本性に関してや身体を通じて魂が行う他の働きに関することでもある。他方で、もし表象にかかわる知性認識のためにのみ魂が身体と合一するとしても、[魂と身体の] 合一が表象を媒介とするということにはならない。というのもその場合には、魂が身体と合一するのは知性認識することのため、すなわち魂を通じて人間が知性認識することのためだからである。そうしたことが、もし合一が表象を通じて行なわれるならばありえないこと、上述の通りである⁸⁰。

十二。第十二に対しては次のように言わなければならない。魂が賦与される前に身体は或る形相を有している。ところで、魂が到来するとその形相は留まらない。というのも、魂の到来は何らかの生成を通じたものだからである。ところで、一方のもの生成には他方のものの消滅が伴う⁸¹。例えば、火の形相が質料において受容されると、空気はその質料において現実的に存在することをやめ、可能態において留まるのみとなる。また、形相が生成するないしは消滅すると言ってはならない。その理由は以下の通りである。生成 (feri) および消滅はそれの内に存在が属するところのものに属するが⁸²、存在は「現に」存在しているものとしての形相に属するのではなく、むしろそれによって或るものが存在するところの形相に属する。それ故に、生成もまた、可能態から現実態へと還元される限りでの複合体に対してのみ言われる。

十三。第十三に対しては次のように言わなければならない。胎児においては何らかの生の営みが現れる。しかるに、このような類の営みは母親の魂に由来していると主張した人々がいるが⁸³、それは不可能である。なぜなら、生の営みの理拠には、それが内

いなかったこともあって、トマスは第一パリ時代に書いた著作においては同書に言及していないが、その後はこの箇所のように言及が見られるようになる。Cf. トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第72章(註44を見よ)；『定期討論集 魂について』第10問題第4異論 (Ed. Leon., t. 24.1, p. 87, ll. 24-40)；『神学大全』第1部第76問題第7項第1異論解答(註45を見よ)；第8項第1異論 (Ed. Leon., t. 5, p. 232)；第38問題第5項第3異論解答(註44を見よ)；『靈魂論』註解』第2巻第9章 (Ed. Leon., t. 45.1, p. 247, l. 204)；『心臓の運動について』 (Ed. Leon., t. 43, pp. 127-30, ll. 53-55, 113-5, 133-48, 242-4)。

⁷⁹ 本項主文第一段落を見よ。

⁸⁰ 本書第2項主文(石田訳, pp. 142-3)を見よ。

⁸¹ 註69を見よ。

⁸² 「生成することおよび消滅することはそれの内に存在することが属するところのものに属する (eius est fieri et corrumpi cuius est esse)」という言明と同様のものがトマスによって用いられている箇所については次の通り：『対異教徒大全』第4巻第48章 (Ed. Leon., t. 15, p. 154a, ll. 6-8)；『神学大全』第1部第110問題第2項主文 (Ed. Leon., t. 5, p. 512)；第2-1部第110問題第2項第3異論解答 (t. 7, p. 313)。

⁸³ Cf. アリストテレス『動物発生論』第2巻 (733 b 26-30)、「何かから」というその「何」は質料で

的な源——すなわち魂——に由来するということが属しているからである。それに対して、始めに自育的魂が内在していて、その同じ魂がより完全なものになると感覺的魂になり、そしてついに知性的魂になるが⁸⁴、それは外的な能動者——すなわち神——の活動 (actio) を通じたことであると主張した人々がいる。しかしながらこれは不可能である。第一に、実体形相が多かれ少なかれ [何かを] 受容するということになってしまい、また生成が連続的な運動であることになってしまうからである。第二に、理性的魂が可滅的なものになってしまうからである。というのも、理性的魂の基礎 (fundamentum) が自育的実体 (substantia uegetabilis) と感覺的実体 (substantia sensibilis) であると指定される場合に、自育的魂と感覺的魂は可滅的なものだからである⁸⁵。他方で、三つの魂が

あって、或る動物は最初の質料を雌親からもらって自体内に貯えているが (たとえば、胎生せずに蛆生または卵生する動物)、或る動物は [出産後も] 長いあいだ哺乳によって雌親からもらう (たとえば、体外のみならず、体内へも胎生する動物) (島崎訳, p. 152)。

⁸⁴ このような見解をトマスはアヴィケブロンに帰している。詳しくは次の通り: 『「命題集」註解』第 2 巻第 12 区分第 1 問題第 4 項主文 (Ed. Mandonnet, t. 2, p. 314), 「ひょっとすると次のように言われることがあるかもしれない。『生命の泉』の立場によれば、第一の形相は一であり、そしてそこに質料において第一に共通の物的形相が導かれ、その後で種的に区別された諸々の形相が導かれる。」; 『第十一任意討論』第 5 問題第 1 項 (Ed. Leon., 25.1, pp. 158-9, ll. 34-47), 「諸々の形相の秩序をめぐっては二つの見解が存在する。一つはアヴィケブロンおよび彼の追従者の内の何人かのものである。彼らは、類と種の秩序に即して相異なる実体形相が到来し合っていると主張している。例えば、実体があり、物体があり、魂を有する身体があり、動物があるといった具合である。故に彼らが主張するところによれば、何らかの実体形相とはそれを通じてたんに実体が存在するところのものであり、さらにそれを通じて物体が存在するところのものは何らか別の形相であり、次にそれを通じて魂を有する身体が存在するところのものは別の形相であり、そしてそれを通じて動物が存在するところのものは別の形相であり、同様にまた、それを通じて人間が存在するところのものは別の形相である。このようにして彼らは諸事物の他の実体形相についても主張を行っている。」; 『「靈魂論」註解』第 2 巻第 1 章 (Ed. Leon., 45.1, p. 71, ll. 258-264), 「以上を通じて『生命の泉』におけるアヴィケブロン達の立場が除外される。彼が指定したところによれば、類と種の秩序に即して、同一の事物においては多数の実体形相の秩序が存在する。例えば、人間のこれこれの個体においては或る一つの形相が存在するが、それはそれを通じて実体が存在するところのものであり、それを通じて物体が存在するところの形相とは別であり、第三の形相としてそれを通じて魂を有する身体が存在するところのものであり、他のものについてもこのようである。」; 『「生成消滅論」註解』第 1 巻第 10 講 (Ed. Leon. t. 3, pp. 300-1), 「それ故に、アヴィケブロンが『生命の泉』において述べている見解が誤りであることは明らかである。それは以下のようなものである。質料においては諸々の形相の秩序が存在しているのであって、質料に対して第一にそれに即して実体が存在するところの形相が到来し、その後には到来するのはそれに即して物体が存在するところの別の形相であり、その後には到来するのはそれに即して魂を有する身体が存在するところの別の形相であり、そのようにして他の形相についても同様である。」。アヴィケブロンの名に言及しないこともある。Cf. 『神学大全』第 1 部第 118 問題第 2 項第 2 異論解答 (Ed. Leon., t. 5, p. 566), 「或るひとびとは、かくして、最初に内在していた自育的魂の上に、これとは別な感覺的魂という魂が加わり、さらにその上にまた別な知性的魂という魂が加わってくるのだと論じている。かくては、人間のうちに三つの魂が存在し、その一つは他の一つに対する可能態においてある、ということになるであろう。こうした考えは、然し、さきにすでに不可とされたところである。／それゆえ、他のひとびとは、最初は単に自育的たるにすぎなかったその同じ魂が、後になると、胚種のうちに存するちからの働きに導かれて、感覺的でもあるごとき魂となり、そして最後に、やはりこの同じ魂が、今度は胚種の能動的なちからによってではなく、上位の能動者、つまり外から照明するところの神のちからによって導かれて、知性的な魂となるにいたる [略] と説いている。」 (『神学大全 第 8 冊』高田三郎・横山哲夫訳、創文社、1962 年, pp. 303-4); 『定期討論集 魂について』第 9 問題主文 (註 62 を見よ)。また註 57 を見よ。

⁸⁵ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第 1 部第 118 問題第 2 項第 2 異論解答 (Ed. Leon., t. 5, pp. 566-7),

或る一人の人間において存在すると言うことはできないこと、既述の通りである⁸⁶。残るは、人間ないし動物の生成においては、多くの生成および消滅が互いに続いていると言わなければならない。というのも、より完全な形相が到来したら、より不完全な形相はなくなるからである。かくして、胎児においては第一に自育的魂しか存在しないとしても、より大きな完全性に達したならば、より不完全な形相は除外されて、より完全な形相——すなわち自育的魂であると同時に感覺的魂であるもの——が続き、最終的にはその自育的魂であると同時に感覺的魂であるものが退いた上で最も完結した最終的な形相——すなわち理性的魂——が続くのである⁸⁷。

十四。第十四に対しては次のように言わなければならない。数学的物体 (*corpus mathematicum*) は抽象的物体 (*corpus abstractum*) と言われる。それ故に、数学的物体が可感的なものの中に存在していると言うことは、二つの相反するもの (*opposita*) が同時に存在していると言っていることになること、アリストテレスが『形而上学』第三巻で⁸⁸ そのようなことを措定するプラトン主義者に反論している通りである。他方でまた、もし数学的物体が知性の内にも存在するとすれば、抽象するものには虚偽があるということとは帰結しない⁸⁹。なぜなら、抽象する知性は、或る物体が可感的なものの中に存在

「[註 84 の引用の続き——引用者注] 然し、かかる考えも成立しない。その理由としては、第一には、如何なる実体的形相も「より多く・より少く」という程度の差を容れず、却って、より大なる完全性が加わってくれば別の種を構成するにいたるものなのであって、それはちょうど、「一」の附加は数における別の種を構成するのと選ぶところはない。[略] 第二に、動物の出生ということが、あたかも質的変化の場合におけるごとく、徐々に、不完全なものから完全なものへと進展してゆく連続的な運動であるといった帰結が導かれることになるであろう。第三に、人間乃至は動物の「出生・生み」ということが端的な意味における「生み」ではない、といった帰結が導かれるであろう。[略] 第四に、神の働きに起因するところのものについてであるが、もしこれが自存的な何ものかであるとするならば、それは、先在していた自存的ならぬ形相とは本質的に別なものでなくてはならず、かくては、身体のうちには幾つもの魂を措定するひとびとの見解の再現となるであろう。またもし、それが自存する何ものかではなく、予め存在している魂の或る完全性であるとするならば、その場合には、身体が減れば知性的魂もまた滅びるという帰結が必然に基づいて導かれることになる [略]」(高田・横山訳 (第 8 冊), p. 304) .

⁸⁶ 本項正文最終段落を見よ。

⁸⁷ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第 1 部第 118 問題第 2 項第 2 異論解答 (Ed. Leon., t. 5, p. 567), 「我々は、それゆえ、こういわなくてはならぬ。一つのものの生まれることは常に他のものの滅びることなのであってみれば、人間にあっても他の諸々の動物にあっても、より完全な形相が到来するにおよんでは、それ以前の形相の消滅が行なわれるわけであり、それでいて、後来の形相は、最初の形相の有する一切のものをやはり有しているのみならず、さらにまたそれ以上のものを有しているのである、としなくてはならない。かくして、人間にあっても他の諸々の動物にあっても、幾多の生出と消滅を経て、究極の実体的形相への到達が行なわれる。そしてこのことは、腐敗から生まれる諸動物の場合において、我々の感覚に明らかながらである。このようにして、だから、我々は、知性的魂は人間の出生の終局において神によって創造されるのであり、こうした魂が、知性的たると同時に感覺的でもあるしまた栄養摂取的でもあるのだ——さきに存在していた諸々の形相は滅びてしまっているが——、としなくてはならない。」(高田・横山訳 (第 8 冊), p. 305) ; 『神学綱要 (*Compendium Theologiae*)』第 1 部第 92 章 (Ed. Leon., t. 42, p. 114, ll. 99-121) .

⁸⁸ Cf. アリストテレス『形而上学』第 3 巻 (998 a 13-14), 「つぎに、この説 [= エイドスと感覺的事物の間に中間のものが存在していて、しかもそれが感覺的事物の内に存在しているとする説——引用者注] の必然的帰結として、同一の場所に二つの固体が存在しうることになる」(出訳 (上), p. 91) ; トマス・アクィナス『『形而上学』註解』第 3 巻第 7 講 (Ed. Cathala & Spiazzi, p. 117) .

⁸⁹ 「抽象するものに虚偽はない」という言明については註 23 を見よ。

しないということを知性認識するのではなく、むしろ可感的なものを知性認識することなくその或る物体を知性認識するからである。例えば、もし或る人が人間のことを、その人間の可笑性 (*risibilitas*) を知性認識することなく知性認識するとすれば、虚偽を犯さない。ところでもし、人間は笑いうるものではないということ [或る人が] 知性認識するとすれば、虚偽を犯していることになるだろう。他方で、私が述べているのは次のようなことである。もし数学的物体が可感的物体の内に存在するとすれば、数学的物体はたんに次元的な⁹⁰ものであるのだから、量の類に属する。それ故に、その数学的物体には何らの実体形相も必要とされないであろう。ところで、実体の類の内にある物体は実体形相を有している。それはすなわち物体性と呼ばれており、三次元のことではなく、むしろ何であれそれから質料において三次元が帰結するような実体形相のことである。そしてこの形相は火においては火性であり、動物においては感覺的魂であり、人間においては知性的魂である。

十五。第十五に対しては次のように言わなければならない。定義の諸部分が形相なし [種的] 形象 (*species*) の諸部分であるのは、形相の実在的な区別によるのではなくむしろ可知的な区別によるものであること、既述の通りである⁹¹。

十六。第十六に対しては次のように言わなければならない。魂はたとえ現実態においては物体性を有していなくても、他方で潜勢態においては [物体性を] 有している。それは、太陽が熱を [潜勢態において有している] のと同様である⁹²。

十七。第十七に対しては次のように言わなければならない。註釈家アヴェロエスが言及している⁹³その秩序は、たんに可知的理拠によるものである。なぜなら、質料が完成されるということが知性認識されるのは、種的形相よりも先に普遍的形相の理拠に即してだからである。それは、或る有が生物よりも先に、また生物が動物よりも先に、そして動物が人間よりも先に知性認識されるのと同様である。

十八。第十八に対しては次のように言わなければならない。類や種に属する存在であれば何であれ、その類ないし種に固有の附帯的なものがそれを伴う。それ故に、物体であるというこの類の理拠に即して質料が既に完全なものとして知性認識される場合、その質料においてはこの [物体という] 類の固有な附帯的なものである諸次元が了解されるのであって、かくして質料においてはその [質料の] 相異なる部分に即した可知的な秩序に則って相異なる元素的形相が続くのである。

十九。第十九に対しては次のように言わなければならない。熱は火と空気にあつては種において同じである。なぜならいかなる質も、それにおいてその質が完全な仕方で存在する或る一つの基体に帰される一方、併在 (*concomitantia*) ないし淵源 (*deriuatio*) を通じて、[それにおいては] その質が不完全な仕方で存在するもう一方の基体にも帰されるからである。故に、しかじかの空気からしかじかの火が生じる場合、熱は種において

⁹⁰ 「次元的な (*dimensionalis*)」という言葉はトマスにおいては僅か2回だけ用いられている。この箇所以外は次の通り: 『第八任意討論 (*Quodlibet VIII*)』第2問題第1項第2異論 (Ed. Leon., t. 25.1, p. 55, l. 27)。

⁹¹ 本項第3異論解答を見よ。

⁹² ここでトマスが言いたいのは、より高次の形相にはより低次の形相に含まれているものはすべて含まれているということであると思われる。

⁹³ 本項第17異論を見よ。

同じままが増加されるので、数においては同じままではない。なぜなら、基体は同じままでないからである。またこのこと [=火と空気において熱が種的には同じだが数的には同一でないこと] は、[水から火への置換と比べた空気から火への] 置換の困難さに資することもない。というのも[空気における熱は]、基体 [=空気] の消滅によって附帯的に消滅するからであり、能動者の反対対立によって[実体的に消滅する] からではない。

二十。第二十に対しては次のように言わなければならない。そのままのものとして考察される⁹⁴限りでの質料はあらゆる形相と関係しているが、動かすものの力を通じて種的形相へと限定されること、『生成論』第二巻で教えられている通りであり⁹⁵、そして質料における諸々の可知的形相の秩序に即して自然の能動者の秩序が存在する。実際、諸々の天体そのもの間には一方が他方よりも普遍的な能動者が存在するが、より普遍的な能動者は下位の能動者と独立に活動するわけではなく、むしろ最末端の能動者はあらゆる上位の能動者の力において[自らに] 固有なことを活動として行う。それ故に、相異なる能動者から相異なる形相が或る一つの個体において刻印づけられるのではなく、むしろ近接の能動者によって刻印づけられるような形相が一つあって、それが自らの内に潜勢態において先行するあらゆる形相を含み込んでいる。そして、普遍的形相の理拠とそれに付随する附帯的なものの理拠の下で、完全なものとして考察される限りでの質料は、後続する完全性にとって固有なものとして生じているのである。

二十一。第二十一に対しては次のように言わなければならない。各々の類は可能態と現実態によって分割されるのだから、実体の類における可能態そのものは質料であり、それは現実態が形相であるのと同様である。それ故に、質料が形相の下に存在するのは[質料そのものとは] 別の或る可能態を媒介とすることによってではない。

(いしだ・りゅうた 筑波大学人文社会科学研究所 哲学・思想専攻)

⁹⁴ 「そのまま考察する (nude considerare)」という言明は次の箇所にも見られる: 『ポエティウス「三位一体論」註解』第6問題第1項 (Ed. Leon., t. 50, p. 162, ll. 323-4) .

⁹⁵ Cf. アリストテレス『生成消滅論』第2巻 (335 a 30 - b 6) , 「ある始原は素材(質料)としての始原であり、また別の始原は形態としての始原である。しかし、第三の始原もまた、それらに加えて存立していなければならない。というのも、第一のものの場合も二つの始原だけでは十分でないように、ここでもまた、二つの始原だけでは、ものを生み出すのに十分ではないからである。／ところで、素材(質料)としては、存在することと存在しないことの可能なものが、生成しうる諸事物にとっての原因である。というのも、あるものは必然的に存在するものであり——例えば永遠的なもの——、また別のものは必然的に存在しないものである(これらのうち、前者は存在しないことの不可能なものであり、後者は存在することの不可能なものである。なぜなら、これらは必然性から外れて別のあり方をするのが不可能だからである)。しかしまた、幾つかのものは、存在することも存在しないことも可能なものである。そしてこれが、生成し消滅するものである。なぜなら、このものは、ある時には存在し、ある時には存在しないものだからである。したがって、必然的に、生成と消滅は、存在することと存在しないことの可能なものについて成り立つ。それゆえ、素材(質料)としては、これが生成するものにとっての原因である。他方、「そのために」(目的因)としては、形態ないし形相が原因である。」(金山訳, p. 330-1) . この部分に対するトマスの註解は残念ながら存在しない。